落梅集

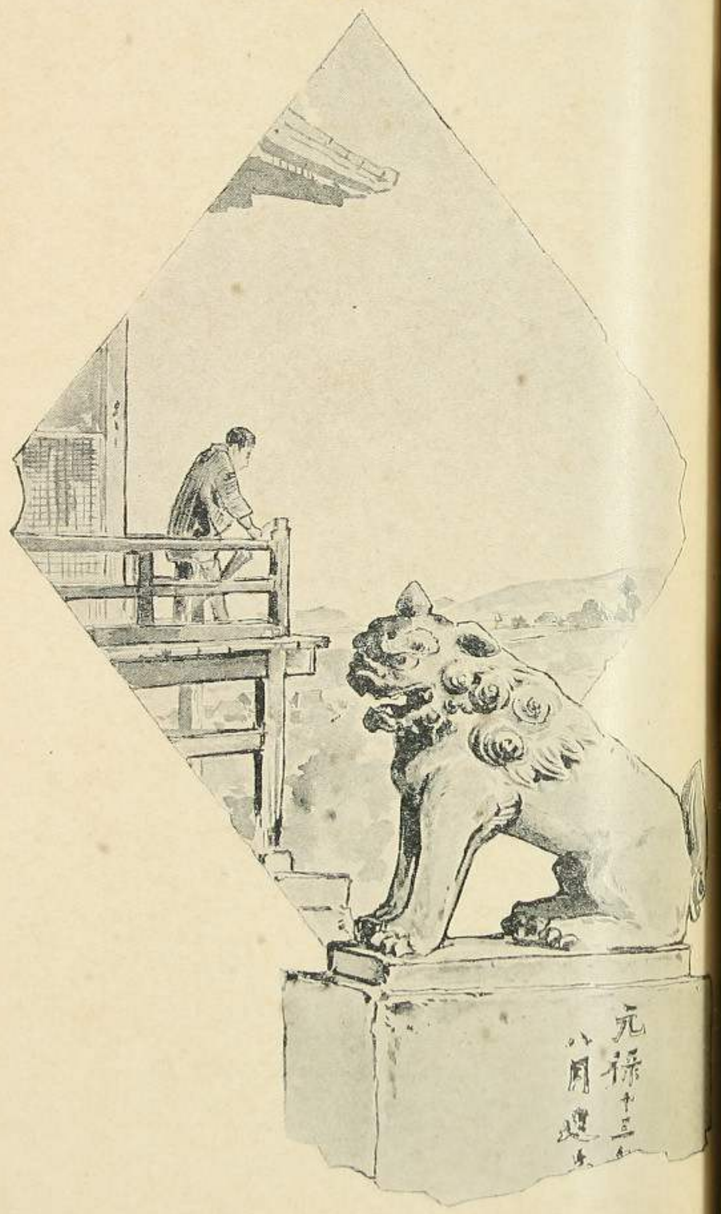
藤村著
不折画

落梅集

梅田藏書

落梅集

鷓鴣杓鸚鵡杯
百年三萬六千日
一日須傾三百杯
遙看漢水鴨頭綠
恰似葡萄初釀醅
此江若變作春酒
壘麴便築糟丘臺
千金駿馬換小妾
笑座雕鞍歌落梅
車傍側掛一壺酒
鳳笙龍管行相催



わが口唇は千曲川の蘆のごとし。その葉は風に鳴りそよぎてあやしきしらべに通ふめるごとく、わが口唇もまた震ひ動きて朝暮の思を傳ふるまでなり。かれをしらべといはんには、あまりにかすかなり、これを歌といはんには、あまりにつたなくおさなきものなり。

梅田藏書

目次

小諸なる古城のほとり……二
勞働雜詠
其一　朝……四
其二　晝……九
其三　暮……一四
壯年の歌
其一　埋木……一九
其二　告別……二一
其三　佯狂……二四
其四　草枕……二八
其五　幻境……二九

其六　邂逅……三四
惡夢……三六
雲……四四
黄昏……七六
緑蔭……七七
罪……八〇
胸より胸に
其一　めぐり逢ふ君やいくたび……八二
其二　あゝさなり君のごとくに……八四
其三　思より思をたどり……八六
其四　吾戀は河邊に生ひて……八八
其五　吾胸の底のこゝには……八九

其六　君こそは遠音に響く……九二
蜑のなげき……九四
浦島……九六
銀鎖……九八
夏の夢……一〇〇
利根川だより……一〇二
椰子の實……一二六
海邊の曲……一二八
蟹の歌……一三二
舟路……一三三
千曲川旅情の歌……一三五
常盤樹……一三七

寂寥……一四二
響りん〳〵音りん〳〵……一五四
藪入……一五八
鼠をあはれむ……一六四
問答の歌二首……一六六
鳥なき里……一七〇
七曜のすさび
木曜日の散歩……一七三
金曜日の懐舊……一八〇
土曜日の音樂……一八二
日曜日の談話……一九一
月曜日の手紙……一九九

火曜日の新茶……二〇六
水曜日の送別……二一六
雅言と詩歌……二二二

落梅集

島崎藤村著

落梅は胡笳の歌にして羌笛の韻なり。張騫が西域よりして摩訶兜勒の一曲を得たるや、李延年さらに新聲二十四解を造りき。横吹十五曲のうち落梅花とあるはこの調なりといへり。われ信濃なる山家に草枕ひき重れて、こゝに旱や二とせ、客心慰めかねし折々書き綴りなとしけるをとりあつめて落梅集といふは、淺間山のふもとなる鄙のしらべといふこゝろを名け、また一つには千曲川に散り浮く梅の花の水は流れて香は僅に殘りたる旅の思を盡さんとてなり。

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に満ちる香も知らず
浅くのみ春は霞みて
麥の色はづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

勞働雜詠

其一　朝

朝はふたゝびこゝにあり
朝はわれらと共にあり
埋れよ眠行けよ夢
隱れよさらば小夜嵐

諸羽うちふる鷄は
咽喉の笛を吹き鳴らし
けふの命の戰鬪の

よそほひせよと叫ぶかな

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

雲に鞭うつ空の日は
語らず言はず聲なきも
人を勵ます其音は
野山に谷にあふれたり

流るゝ汗と膩との

落つるやいづこかの野邊に
名も無き賤のものゝふを
來りて護れ軍神

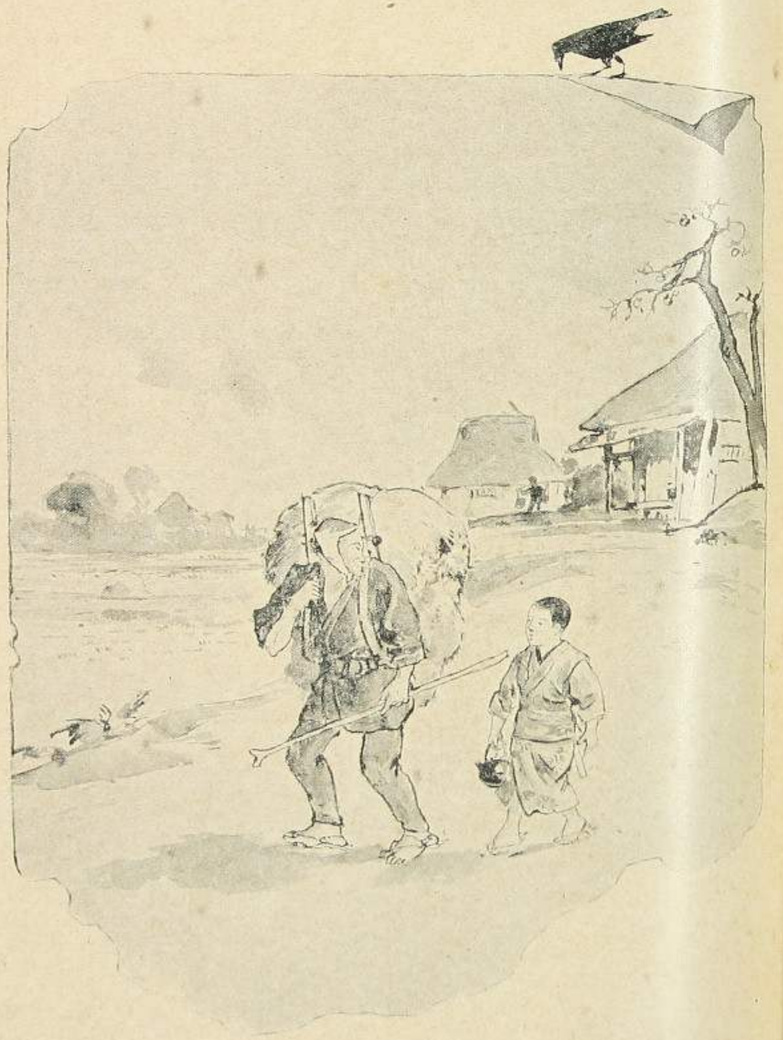
野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

あゝ綾絹につゝまれて
爲すよしも無く寢ぬるより
薄き襤褸はまとふとも
活きて起つとそをかしけれ

匍匐ふ蟲の賤が身に
羽翼を惠むものや何
酒か涙か歎息か
迷か夢か皆なあらず

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

さながら土に繫がるゝ
重き鎖を解きいでゝ
いとゝ暗きに住む鬼の



笞の責をいでむ時

口には朝の息を吹き
骨には若き血を纏ひ
胸に驕慢手に力
霜葉を履みてとく來れ

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶くく馬もやれ

其二

誰か知るべき秋の葉の
落ちて樹の根の埋むとき
重く聲無き石の下
清水溢れて流るとは

誰か知るべき小山田の
稻穗のたわに實るとき
花なく香なき賤の胸
生命躍りて響くとは

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野の邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

血潮は草に流さねど
力うちふり鍬をうち
天の風雨に雷霆に
わが闘ひの跡やこゝ

見よ日は高き青空の
端より端を弓として
今し父の矢母の矢の

光を降らす眞晝中

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

左手に稻を捉む時
右手に利鎌を握る時
胸滿ちくれば火のごとく
骨と髓との燃ゆる時

土と塵埃と泥の上に

汗と膩の落つる時
緑にまじる黄の莖に
烈しき息のかゝる時

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

思へ名も無き賤ながら
遠きに石を荷ふ身は
夏の白雨過ぐるごと
ほまれ短き夢ならじ

生命の長き戰鬪は
こゝに音無し聲も無し
勝ちて桂の冠は
はづかに白き頰かぶり

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

其三　暮

揚げよ勝鬨手を延べて
稲葉を高くふりかざせ
日暮れ勞れて道の邊に
倒るゝ人よとく歸れ
彩雲や
落つる日や
行く道すがら眺むれば
秋天高き夕まぐれ
共に蒔き
共に植ゑ

共に稻穗を刈り乾して
歌ふて歸る今の身に
ことしの夏を
かへりみすれば
嗚呼わが魂は
わなゝきふるふ
この日怖れをかの日に傳へ
この夜望みをかの夜に繫ぎ
門に立ち
野邊に行き
ある時は風高くして
青草長き谷の影
雲に嵐に稻妻に

行先も暗く聲を呑み
ある時は夏寒くして
山の鳩啼く森の下
たま〳〵虹に夕映に
末のみのりを祈りてき
それは逝きて
これば來てし
餓と涙と送りてし
同じ自然の業ながら
今は思ひのなぐさめに
光をはなつ秋の星
あゝ勇みつゝ躍りつゝ
諸手をうちて笑ひつゝ

樹下の墓を横ぎりて
家路に通ふ森の道
眠る聖も盗賊も
皆な土くれの苔一重
霧立つ空に入相の
精舍の鐘の響く時
あゝ驕慢と歡喜と
力を息に吹き入れて
勝ちて歸るの勢に
揚げよ樂しき秋の歌

壯年の歌

わかものゝかたりていへる
人の身にやどれる冬の
暮れてゆく命を見れば
雪白く髪に流れて
日にあたる花も香もなし
枯草をすがたに刻み
食ひ飲みて寝ふばかり
わのづから眠にかへる
老こそは奇しきものなれ

ある翁こたへていへる
われとても君にさながら
身にさかる夏は經にけり
稲妻はこゝろにさわぎ
白雨はむねにそゝぎぬ
わればかり栃木といふや
きみばかり青葉といふや
小夜嵐やがて襲はど
君もまた老の餌なる

其一　埋木

羽翼なければ繋がれて
朽ちはつべしとかねてしる

光なければ埋もれて
老いゆくべしとかねてしる

知る人もなき山蔭に
朽ちゆくことを厭はねば
牛飼ふ野邊の寂しさを
かくれがとこそ頼むなれ

埋もるゝ花もありやとて
獨り戸に倚り眺むれば
ゆふべ空しく日は暮れて
牧場の草に春雨のふる

其二　告別

罪人と名にも呼ばれむ
罪人と名にも呼ばれむ
歸らじとかねて思へば
嗚呼涙さらば故郷

駒とめて路の樹蔭に
あまたゝびかへりみすれば
輝きて立てる白壁
さやかにも見えにけるかな

鬣は風に吹かれて
吾駒の歩みも遅し
愁ひつゝ蹄をあげて
雲遠き都にむかふ

戰ひの世にしあなれば
野の草の露と知れゝど
吾父の射る矢に立ちて
消えむとは思ひかけずよ

捨てよとや紙にもあらず
吾心燒くよしもなし
捨てよとや筆にもあらず

吾心折るよしもなし

そのねがひ親や古りたる
このおもひ子や新しき
つく〳〵と父を思へば
吾袖は紅き血となる

靜息なく激ぎつ胸には
柵もなにかとゞめん
洪水の溢るゝごとく
海にまで入らではやまじ

はらからやさらば故郷

去ねよ去ねよ去ねよ吾駒
諸共に暗く寂しく
故の園を捨てゝ行かまし

其三　佯狂

蝴蝶の夢の人の身を
旅といふこそうれしけれ
常世に長き天地を
宿といふこそをかしけれ
青き山邊は吾枕
花さく野邊は吾衾

星縫ふ空は吾帳
さかまく海は吾緒琴
いづこよりとは告げがたし
いづこまでとは言ひがたし
いま日の光いま嵐
來る歡樂哀傷の
人のさかりをかりそめに
夏といはんもおもしろや
あゝわれひとの知らぬ間に
心の色は褪せ易し

胸うち掩ふ緑葉の
若き命もいくばくぞ

かんばせの花紅き子も
あはれやは早く翁顔

あるひは高く撃てれども
翅砕けて八重葎
あるひは遠く舞へれども
望は落ちて塵埃

譽も聲も浮ける雲
すぐれし才はいづこぞや

涙も夢も草の雨
流れて更に音も無し

思ふて誰か傷まざる
歩みて誰か迷はざる

人の命を兒童の
嘻戯と言ふは誰が言葉
賤も聖も丈夫も
兒童ならぬものやある

晝には晝に遊ぶべし
夜には夜に遊ぶべし

破りはつべき世ならねば
身は狂ふこそ悲しけれ

捨てつ捨ひつこの命
行きつ運りつこの環

其四　草枕

落葉松の樹はありとても
石南花の花さくとても
故郷遠き草枕
思はなにか慰まむ

旅寢は胸も病むばかり
沈む憂は酔ふがごと
獨りぬる夜の夢にのみ
たゞ夢にのみ山路を下る

其五　幻境

ふと目は覺めぬ五とせの
心の酔に驚きて
若き是身をながむれば
はや吾春は老いにけり
夢の心地も甘かりし

昔は何を知れとてか
清しき星も身を咒ふ
今は何をか思へとや
剛愎なりし吾さへも
折れて泣きしは戀なりき
荒き胸にも一輪の
花をかざすは戀なりき
勇める馬の狂ひいで
鬣長く嘶なきて
風こゝちよき青草の
野邊を蹄に履むがごと

又は眼も紫に
胸より熱き火を吹きて
汲めど盡きせぬ眞清水の
泉に喘ぎよるがごと
若き心の踴りては
軛も綱も捨てけりな
こがれつ醉ひつ筆振れば
筆神ありと思ひてき
あゝうつくしき花草は
咲く間を待たで萎むらん
消えはてにけり吾戀は

藝術諸共消えにけり

そは何故のうき世にて
人に誠はありながら
戀路の末はとこしへの
冬を性命に刻むらむ

黑髮われを覆ふとも
血潮はわれを染むるとも
花口唇を飾るとも
思は胸を傷ましむ

繪筆うちふる吾指は

歎きのために震ふかな
涙に濡るゝ吾紙は
象空しく消ゆるかな

かはりはてたる吾命
かはりはてたる吾思
かはりはてたる吾戀路
かはりはてたる吾藝術

この世はあまり實にすぎて
あたら吾身は夢ばかり
なぐさめもなき幻の
境に泣てさまよふわれは

其六　邂逅

縫ひかへせ縫ひかへせ
膩に染みし其袂
涙に濡れし其袂
濯げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
君が衣を縫ひかへせ
愁は水に汗は瀬に
濯げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
捨てよ昔の夢の垢
やめよ甲斐なき物思
濯げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
腐れて何の袖かある
勞れて何の道かある
濯げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
薄き羽袖の蟬すらも
歌ふて殼を出づる世に

濯げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
君がなげきは古りたりや
とく新しき世に歸れ
濯げよさらは嘆かずもがな

悪夢

少年の昔よりかりそめに相知れるなにがし、獄に繋がるゝことこゝに三とせあまりなりしが、はからざりき飛報かれの凶音を傳へぬ。今春獄吏に導かれて、かれを巢鴨の病床に訪ひしは、舊知相見るの最後にてありき。かれ學あり、才あり、西の國の言葉にも通ず、宗教の旨をも味はひ知り、おほかたの藝能にもつたなからず、人にも侮られまゝき程の品かたちは持てりしに、其半生を思ひやれば實に慘苦と落魄との連鎖とも言ふべかりき。かれは春の日の長閑に暖かなる家庭に生ひたちて、希望と幸福とを一身に荷ひたりしかど、やがて獄窗に呻吟せしの日は人生流離の極みを盡したるの後なりき。あはれむべし、死と狂と罪とを除きて他にかれの行くべき道とてはあらざりしなり。われは今、かれが惡夢を憐むの餘り、一篇の蕪辭四人の愁ひをとりて、みだりに花鳥の韻事を穢す、罪の受くべきはもとよりわが期する所なり。

其耳はいづこにありや
其胸はいづこにありや
激り落つ愁の思
この心誰に告ぐべき

秋蠅の窓に殘りて
日の影に飛びかふごとく
あぢきなき牢獄のなかに
伏して寢ねまたも目さめぬ

夜な〳〵の衾は濡れて
吾床は乾く間も無し
黑髪は霜に衰へ
若き身は歎きに老いぬ

春やなき無間の谷間
潮やなき紅蓮の岸邊
憔悴の死灰の身には

熱き火の燃ゆる罪のみ
銀の臺も碎け
戀の矢も朽ちて行く世に
いつまでか骨に刻みて
時しらず活くる罪かも

空の鷲われに來よとや
なにかせん自在なき身は
天の馬われに來よとや
なにかせん鐵鎖ある身は

いかづちの火を吹くごとく

この痛み胸に躍れり
なか〳〵に罪の住家は
濃き陰の暗にこそあれ

いとをしむ人なき我ぞ
隠れむにものなき我ぞ
血に泣きて聲は呑むとも
寂寞の裾こそよけれ

世を知らぬおさなき昔
香ににほふ妹を抱きて
すゝりなく恨みの日より
吾虫は騒るばかり

わがいのち戯の臺
その悪を舞ふにやあらん
わがこゝろ悲しき鏡
その夢を見るにやあらん

人の世に羽を撃つ風雨
天地に身は捨小舟
今更に我をうみてし
亡き母も恨めしきかな

父いかに舊の山河
妻いかに遠の村里
この道を忘れたまふや

この空を忘れたまふや

いかなれば歎きをすらん
その父はわれを捨つるに
いかなれば忍びつ居らん
その妻はわれを捨つるに

くろがねの窓に綰りて
故郷の空を望めば
浮雲や遠く懸りて
履みなれし丘にさながら

さびしさの訪ひくる外に

おとなひも絶えてなかりし
吾窓に鳴く音を聽けば
人知れず涙し流る

鵯よ翅を振りて
黄葉の陰に歌ふか
幽囚の苦の責や
人の身は鳥にもまかじ

あゝ一葉枝に離れて
いづくにか漂ふやらん
照れる日の光はあれど
わがたましひは暗くさまよふ

雲

こぞの四月都を辭して信濃に赴く時、わが行李のうちには近世畫家論五卷をも納めたり。水清く草青き野山の間を經めぐりて、客心の友とせむには紀行の文もすくなからず、詩歌の集も亦さはなり、されど一とせは一つの處にふみとゞまりて、こまやかに一つの山水を研究するのたよりとなること、かの五つの卷々に及ぶものあるまじくや。旅は殊更折節のうつりかはりも身にしみて、朝に望み夕に眺むる雲烟の趣を心に浮べ、いさゝか自然の一はしを學ばむと思ひ立ちしも、實はかの故人が苦心に勵まされてなり。

小諸は千曲川に添へる北佐久の郡にありて雲を見るに五つの利あり。春より秋へかけて雨すくなきこと一つなり。海面を拔くこと三千尺、殆ど筑波の嶺と同じ高さなること一つなり。東北の間は淺間一帶の山腹に倚ること一つなり。空氣の清澄なること一つなり。高原の上にして天の廣濶なること一つなり。かゝる地勢はわが觀察にまたと得難きところなるべしなど思ひ勇みて、馬琴が歳時記のひそみに倣ふとにはあらねど、こゝに浮遊する雲烟の眺をば時に隨ひてわが手帳の中に納むるを常としたり。

われは近世畫家論第一の卷、第三章、雲を論ずるの四節を翻して、その精緻なる觀察を傳へむと思ふこと屢なりき。このごろ久保學士が山水美論を繙きて雲を論ずといへるを讀みたるに、わが思ふところは既にこの一文に盡したるを見出でぬ。

學士が周到なる筆を振ひて、ラスキンの研究を抄譯し紹介したるの勞はまことに多とすべきなり。げにや、山水美論はすでにふゝ世人の目に觸れしこと多からん。いまだ近世山水畫の辨を讀まざる人も、學士が筆により自然の鑑賞に一歩を進しこと多からん。かく言ふは、わがよろこびを包むに堪へざるのみか、今この小研究のかの章にかゝはるふし多ければなり。

ラスキンはもと英國の山水畫家タアナアを揚げむがために說を樹てたるなれば、其意は詩人を敎へむとにあらざること明かなり、隨て山水に向ふ其着眼は局處の美術のために專なること多くして、時を加味したる美術のために言ふこと少きや明かなり、されど其觀察は丹靑のことにたづさはらぬものといへども據りて敎訓を聞くのたよりと爲すべきもの多し。かれは空際に懸る雲の位置をもて、先づ其性質の依りて成れる要點なることを量り、大凡かの空を三界に分らて、上界を細雲(Cirrus)の界、中界を層雲(Stratus)の界、下界を雨雲(Rain-cloud)の界となせり。細雲の特色としては、第一、齊對、第二、條端の尖利、第三、群合、第四、色彩の純麗、第五、變化を擧げ、すくなくも一萬五千英尺以上の高さならでは形を爲さゝるものとなし、快晴數日の後にして靑空のかなたに棚引く優美なる水蒸氣の群線となせり。層雲は海面を拔くこと五千英尺より一萬五千英尺の間に横はりて、高さ一萬英尺の空際を占め、かの「スウイザアランド」の群山に觸るゝ雲こそ層雲のそれなれといひ、水蒸氣の集りてこの形をなすや、さながら空より轉び落つらんやうに、圓く、重く、厚らかに、濃き灰色の陰なして、活動と力との姿に乏しきものとなせり。層雲が

おのづと觀る人の距離よりして純麗なる色彩と輕快なる灰色の陰とをもてるに引きかへ、又は層雲が折ふしの日光、反射、透射、烟霧、白雨などを受けて、常に色彩の變化をもてるがごとく見ゆるに引きかへ、又は層雲がいかに灰色、暗色なりとも其中おのづから純麗にして輕快ならざるはなき色彩を具ふるに引きかへ、雨雲は見る人の位置近ければ單調なる灰色にして、上なる雲のそれに比ぶれば熱く且つ茶褐の色彩を帶ぶといへり。

顧れば雲に就きて吾心を寄すべき機會も少なからざりき。土佐の古畫には殿上の光榮あるさま、貴族の生涯の長閑さ、狩野派の山水畫には神韻かぎりなきの趣、または佛畫の自在と超逸との意義、これらを示すに古代の畫家が多く用ゐたるも雲なりき。寺院の莊嚴を飾り、靈廟の神聖を飾るがために、む

かしより建築、彫刻の上に象りたるものは多くこの雲なりき。織物の意匠、染物の模樣、陶器の畫、漆器の蒔繪、數ふれば雲烟が美術家の作品に上りて、常に吾心を引けるもの少なしとは言ひがたし、これを詩文の卷々にもとむれば、自然の眺に、人事の比喩に、詩人が想像と觀想とを彩るは雲なり。美術家が自然とわれとの間に立ちて、捉へがたき雲烟の趣を見やすき藝術の上に顯し、或は筆に、或は鑿に、敎ふるところ多かりしかど、雲の智識に就きて吾心に會得せしことは極めて遲くつたなかりき。山水畫の辨を讀むまでは、われは空を仰ぎつゝおぼろげなる感興に滿足したりしなり。當時雲烟は知らざる國の言葉もて綴りなしたる詩歌のごとかりしのみ。われはラスキンの通辨を聞きて、始めて心を雲に傾けぬ。つぎてさま〳〵の疑問はわが胸中に往きかよひたり。樂を學

ばむと思へるものが、始めて指を新しき樂器に觸れ、旋律、加絃、長短の旋法などにつき、おのづと心に幼稚なる疑惑を抱くがごとくに、一つはわが思想の單調を破らむと思へる心より、一つは春潮のごとくに湧きくる自然の愛慕より、一つは又た樂し哀しき人の世の謎の解きて解き難き煩熱を醫するの願ひよりして、心は空行く雲烟の限り無きさまに向ひ、近世畫家論の著者が未だくはしくは說き及ばざりし春雲、秋雲、曉雲、暮雲のけじめなどにつき、汲めば汲むほど、味へば味ふほど、言ふべからざる興味の溢れ出づるを覺えぬ。

天のながめの目を引き心を驚かし易きものは日沒なり。いまだ白き夏雲の影なせる青空の濃き淡きなど味ふほどにもあらざりければ、先づ色彩のあざやかなる暮雲に對ひて、われは一階を登らむと試みたりき。こゞ七月の二十四日は夕暮近く

より白雨の名殘も淸しく空晴れ渡りぬ。飛驒の山々のかなたに傾ぶける夕日の上には薄紫の雲集り、すこしく離れては白色、灰色の雲のかたち、さながら猪鼻のごとくに眺めらるゝもありき。おのづと夕日に近き青空は薄き黃金の色にかはり白かりし雲も灰色と紫色とを帶びて、夕映にうつりかゞやく雲緣は紅隈のごとくに見えぬ。雲の色いくたびか變化して、いづこを何と捉ふるによしなく、この日の雲の位置、夏雲の性質など、見る目覺束なければ、心に思ひ定むるとを得ざりき。われは刀を握りて床上の人體に對するの感ありしなり。薄弱なる解剖の學理も施すに術なかりき。

深く沈める夕影の空に上りて、茅蜩の聲と共にこの日の暮れ行けば、天はさながら水の如く見ゆるがなかに、西の端の黃色を帶びたるは僅に落日の名殘をとゞめたりき。浮べる雲は

灰色より紫色に、紫色より暗色にかはり、雲縁は茶褐色、もしくは洋畫に用ふる「セピア」の色彩に似たりき、夜に入りて一天青藍を流したらんやうに、雲色の暗きはいよ〳〵暗く、星も見えそめぬ。舊暦の幾日に當りしかは覺えねど、月さし登れる頃、仰げば天は秋ほどに澄まず、紫色に青色をまじへたりとも言はまほしき空はえならず幽きところありて、花やかなる光さし添ひたれば、暗かりし雲の色は白銀を見るごとく、且つ茶褐色の陰を帶びたりき。

自然の美なりと思はるゝは、これを見ると共に猶是れ藝術なるかの感あらしむる時にあり、藝術の美なりと言はるゝは、これを見て藝術なることを自覺しつゝも猶是れ自然なるかの感あらしむる時にあり、これ獨逸の哲儒が言葉なり。さすがに味ひ多きことを言ひしものかな。たゞその聯想と想像とは

經驗と觀察との多少によりて、淺くも、深くも、おさなくも、こまやかにも、狹くも、豐かにも覺えぬべきなり。空を動かぬ海のごとく、平かなる物の面のごとく、光線の透射にも、空氣の性質にも思ひ到ることたまたまにして、雲をさながら空とかゝはりなきものに眺めなし、個々の姿の豐かに滿ちたることとも思はず、發相の深くして妙なることをも知らず、ひたすら單純なる雲色の變化、若くは、おほかたの旅客が目にもとゞまるべき雲の形などにのみ心を奪はれたる吾が觀察の淺々しさにも、またこれにふさはしき繪畫を思ひ比べて、雲を見るとともに猶藝術なるかのうる〳〵しき想像は伴ひしなり。

七月二十五日は朝雲を見ばやと東のかた熊野の森の空に浮べるを眺めたるに、暮雲のそれに異なりて、調子さまでに重々しか

ちず、輪郭もまた明かならずして、天の海に溶け行くの趣わりき。同じく夕暮の雲も東に見ると西に見るとは夕映にうつる色彩の同じからざるがごとくに、輕く浮びたるこの日の朝雲も東に望めば純麗なる白色にして、西に望めば灰色と白色と淡紅色とをまじへたりき。この朝西の空にわたりてうすものゝ如くに消え行く高き雲を見たりき。また煙の如くに浮べるをも見たりき。日は登りて漸く天心に近づける頃、東には細雲なゝめに並行して、西の諺に所謂牝馬の尾のごとく、一條として齊對の美を亂すものなきさまは。譬へば琴線の幾條相並びたるに似たりき。細雲の下には層雲群集して所謂夏雲の奇峯相積み相重なり、或は離れて群羊の遊ぶが如き趣を顯しぬ。北の方、牙齒、淺間、黒班、鷹峯の山々の端には純白なる層雲團々として球の如く、南天の下半には練絹の薄きに似た

る細雲、上半には白き煙かとばかりなる水蒸氣の青空を掩ひたるを認めぬ。

この日微風細雲を吹きたわめて、幾多の纖條は片々の小塊となり、遠く望めば綿羊の背のごとく、あるひは帆立貝の殼に似たりき。かゝるためしは其年の夏の空にても三たび四たびほどに過ぎざりし眺めなり。北佐久の高原に浮遊する雲の形は日々にして變り、月々にして極りなけれども、明かにかゝる細雲の變化を見たることは稀なりき。

雲を味ふことの至れる人よりすれば、奇異なる形狀と單純なる輪郭と絢爛なる色彩とのごとき、とりいでゝこれを語ることを恥づるなるべし。されど一見奇なきがごとき天の眺めに無限の妙味を捉ふるほどの人といへども、この境に到れる迄の徑路には、必ずや一たびは奇異なる形狀と單純なる輪郭

と絢爛なる色彩とに驚喜したるの時はありぬべし。夏雲のうちにはこの階梯にかなひたるもの多かり。雲を學ぶものが先づ單純なる階梯よりすべきこと、あだかも繪畫を學ぶものが先づ物の形象よりすべきに同じかるべし。夏の日没はわが雲に入るの門なりき。われは越しかたの無邪氣を記すに躊躇せざるべし。

さすがにをさなかりし吾眼にも、奇畫なる雲の形をさしてすぐれたる雲の趣とはなさゞりき。その奇なるは依樣の奇なるがごとく、裝飾畫の意匠のめづらしきに似たりと思へりき。たゞ絢爛なる色彩に心を奪はれて、いまだその單純なる着眼なりしことに心づかざりし當時にてありければはまことに天工の巧みを盡したる者として、われは七月の廿六日、廿七日の日没を數へぬ。思へば昔見し日没のわが記憶に刻みたるが美し

き幻の如くに浮び出づるもありき。高輪の御殿山にて望たるもそれなり。荒濱の海邊にて望みたるもそれなり。琵琶湖の畔にて望みたるもそれなり。利根川の岸にて望みたるもそれなり。されどこゝの岡に登りて緑葉の色新しき桑畠の間に佇立みつゝ湧くがごとき暮雲のさまを眺めては、ほと〳〵平地にありて見られまじき日没の大觀と定めたりしなり。

七月二十六日の暮は層雲の滿潮とも言ふべかりき。空は皆なを第二界の彩雲をもて覆はれぬ。西は入日の上に輝く層雲の黄色、金色なる、南に浮べるが炎紅色を帶びたる、さらに東なる雲々の灰色と薄き紫色とを混へたる、色彩の變化、發相の豊富、いづれ吾目を引くの種ならざるはなかりき。入日の光花やかに添ひたれば、雲は皆な活きて大氣を呼吸するがごとく、滿天さながら高き情熱の域にあるかと疑はれぬ。畫工に筆はあり

ともこれをば寫さじ、詩人に句はありともこれをば歌はじなど思ひいでゝ、人力の近づくまじき自然の活動に、眺め樂しむと言はんは寧ろ愚かに似たるを驚きぬ。

これを翌二十七日の暮雲に比ぶれば、前のは溢るゝ表情の力のたくましきに勝れ、後のは圓滿なる色彩の調和の美しきに勝れたりとも言ふべかりき。一たびは、われ驚怖を抱き、一たびは、われ慰惜を感じぬ。二十七日の暮は、天晴れ、風すくなく、さきの日の層雲多く群集せしに引きかへ、細雲白銀の網のごとく、白波の磯に碎くがごとく、變化千々の姿をなし、波瀾よろづの態をあらはしぬ。こゝの一夏、この日の暮のごとく細雲集合して色彩と形狀との吾目を樂しましめしことは稀なりき。ことに條々亂れざる第一界の雲の下に、奔放汪蕩たる第二界の雲の浮遊したりければ、われはかれを樂人が所

謂高音の清めるに比べ、これを次中音の深きに譬へ、しかも高低相應じ相協ひ、いみじき和聲に入りたらん心地もせられき。この暮、第二界の層雲を空際に於ける位置の高低より更に上下の二つに別ちて、落日前後雲色の變化を手帳の中にとゞめぬ。

	細雲	上層雲	下層雲
暮	銀白	灰	鼠
日沒前	黃金	紫	蘇芳
同	黃	朋茶	深紫
同	白茶	紫に赤の勝ちたる	濃紫
落日	焦茶	紅	濃き鼠
日沒後	薄赤	濃き灰	鼠に紫のまじりたる
黃昏	薄紫	灰に紫のまじりたる	右の色暗くなりたる

こは入日の光と、日沒後の反射、餘光とを受けたる雲色の變化と言はんかた、更にふさはしかるべきなり。日沒前後の雲色は殆と分時にして變轉し、空は暮れ行くに隨ひて透明なる桔梗の花の色より淡黃なる磁器の色にかはり、淡黃色は灰色となり、又は花田の色ともなりぬ。日の沈まんとせし時、東の空は薄紅を染むるがごとくに見えき。

七月二十八日の朝早く淡々しき白雲の浮びたるを望めば、殘月力なきこと朝顏の花の萎むがごとく、空は花瓶の色にして見まほしき朧氣なるものなりき。日登るに隨ひて空の色青く見えわたりぬ。暮れ行く空の色の透明ならざると、明け放れ行く空の透明ならざると、一つは老いてゆく日光の力なきより、一つはまだうら若き日光のおぼつかなさより、時は異なれども趣はやゝ同じくも思はれしなり。われは試みに夏雲の特色と

すべきものを擧けむとて、諸雲の集合、ことに層雲の瀰漫すること一つ、輪郭の明瞭なること一つ、雲層の大なること一つ、變化の急劇なること一つ、とりわけて色彩の調子の强盛なるをば其性質の顯著なるものに數へたりき。

八月の八日は小諸より長野に一日の旅を思ひ立ちぬ。朝霧たちこめて山々のすその眺めもさだかならざりしが、また夕暮とはさまかはりたる天のけしきの清しく心地よく、朝日に近き空は鼠色の薄き、焦茶色の薄き、とり〳〵にして、日を覆ふ雨雲は紫色に灰色をまじへたらんやうに見え、北には靜かなる層雲相連なりて青き空に浮びたるさま、われに筆あらば畫にもかゝまほしき趣にてありき。

この日、堤防を築く人夫のかけも路すがら望めば長き青草のうちに沒して、楊柳の砂にうづもれたるは羊の群のごとく、近

くは桑畠の連なりたるなかに蜀黍の穂末より房を垂れたるあり、緑濃き青桃の樹は路行く農夫のために深き蔭をなして、ところ〳〵豆の花の咲きいでたるも見え渡りぬ。暗きがなかにも紫色を帶びたる山々の上には、灰色なせる雨雲の重くかゝりて、雲と雲とのあはひより日の光の淡き黄金色にさし照したる、かなたの空には白雨のそゝぐと覺えて俗に狐の嫁入と呼べるさまなど、今にして考ふれば人目を引き易き快晴の雲の眺めに増るとも、劣るまじき雨雲の趣にてありしなり。われは大雲の卷紓するを望みつゝ千曲川に添ふて歸りぬ。

青かりし林檎の實もうまき程に色づきて、紫の李も虫ばみ落つる頃となれば、雲のながめもおのづから盛夏の姿にあらずなりにき。八月十一日の暮、日入るかたの黄なる空には層雲の高きが樺色にしてうつくしく、低きは夕映の光を受けて暗

き紫色のうちに赤色の輝きたるもうれしかりき。丹色とも言はまほしき雲々のあなたに、夕月東の天を領して、月は東に日は西にといひけむ詩境を想ひ起し、それは春、これは夏、それとこれとは景いたく異なりたれど、情はよく對すべきか、興はよく比すべきかなど、眺め佇立みてしばし詩中の人となりにき。

秋は北佐久の山々に訪るゝこと早くして、八月の末には莎鷄すでに悲しむこと頻りなりき。七草の花さかりにして、鷄頭の幹の紅き、豇豆の葉の黄ばみたる、とり〳〵に山家の風情をあらはしぬ。われは地上のさまのうつりかはりに比べ見て、天のかなたも亦た同じさまにうつりゆくことを感じたりき。自然は常に變り行けるなり。八月二十四日の暮雲のごときは、紫色に、灰色に、調子おしなべて盛夏の頃に見られまじき黄色

を認めぬ。日に近く浮べる層雲の色は、赤色又は赤勝ちの樺色なりき。爛灼として目を射るごとき深紅の色彩は、またこの頃より見ることとなかりき。

九月九日の暮。東の青き空に望みたる層雲は輪郭あざやかにして、陰と日向との際立ちたる、彫刻家が鑿を打ち力を振ひて大石を刻みたらんやうに、色は七分の白、三分の黄、層々相重なれる形象の巨大なること、殆と淺間一帶の山々を掩ふばかりなりき。これよりのち、かゝる層雲の圓く重く厚らかなるは、復たわが手帳のうちに上らずなりぬ。天に重々しき層雲の隱れたるは、秋氣漸く人に逼るの頃なりしなり。

夕日にうつる秋雲の黄色を帶びたる、朝日にうつる秋雲の黄色を帶びたる、時につれて濃き淡きの別ちこそあれ、其調子にはおのづから通へるふしのありしなり。九月十一日の朝、東の空に浮べる細雲を望めば、赤きはさながら長き帶を引くがごとく、さし登る秋の日の光に照らされて雲縁は紅隈かと見えたれど、やはらかにして美しきこと言はんかたなかりき。この朝、雲色の變化するさまを左のごとくに認めぬ。

	曉	日前出	日出	日出後	同
細雲	灰	赤に黄のまゝりたる	紅	黄	黄に白のまゝりたる	白

これは眞東に見たる朝雲なれど、南と北とには灰色に紫色のまゝりたるもありき。

日の沈む時、赤色の秋雲は紫色より暗き灰色に變り行くなり。知るべし、暮雲は輝くとも其裏に暗色の潜めることを。日の登

る時、灰色の秋雲は赤色より輕き黄色に變り行くなり。知るべし、朝雲は輝かずとも其裡に光熱の藏るゝことを。かくこゝろづきて、われはすこしく朝暮のけじめに近づきたるのおもひをなしぬ。

夏雲に緑蔭ほどのおもしろさありとせば。秋雲に黄葉ほどの味ひはありぬべし。秋の空は高く澄みわたりて、夏のごとき多量の水蒸氣の上ることなく、又た夏のごとき強盛なる光線の直射を受くることなければ、白色、淡黄色、もしくは灰色の陰なせる雲のながめも、おのづと淡き煙のごとくに見えぬ。夏は空あまりに明かなり、ゆゑに白き水蒸氣の群までも見え透きて、かへりて清澄を欠くなるべし。秋は日の光漸く斜めなり、ゆゑに水蒸氣の目を遮ること薄くして、次第に天の高きを致すなるべし。

小諸の四季は四月、五月を春とし、六月、七月、八月を夏とし、九月、十月を秋として、十一月より翌三月の終までを冬とすべし。冬季は五ヶ月の長きに渡るなり。春は都より遲きこと一月にして、梅花漸く四月に開き、秋は都より早きこと一月にして、霜蕪既に十月に紅なり。十月の二十三日には初霜野邊に到り、十一日の七日には初雪淺間にかゝりぬ。柿の實の赤く、柚の實の黄になりて、百舌鳥鳴きさはぐ樹の下より晩秋の天を望めば、雲色は透明ならざること胡粉をまゞへたらんやうに、かの夏雲の光と水氣とを含みたるとは趣はるかに異なりき。水々しからぬ色彩は凡て晩秋の風物を包めるがごとくに見えぬ。われは天の色彩と地上の色彩と、季節につれて變り行く調子のなかに、面白き符合のあることを心づきたれど、いまだ深くはその關係に思ひ到らざりき。

秋より冬にうつり行く小諸の時季は極めて短く、その變化は又た極めて烈しきものながら、この間に見ゆる暮雲の色彩には、透明ならざる紫を含めるが多かりき。ことに十一月十二日の暮に眺めたるは、紫雲灰色の靜かなるを帶びて、たゞ夕日に近きわたり黄色の心地よきを示しぬ。その調子は深くして、かの夏の日沒の如くに紅色天を焼くの壯觀はなかりきといへども、雲烟縹渺、かぎりなきの趣はありき。

秋雲の含めるは黄色にして、冬雲の含めるは灰色なるべし。十二月の七日、暮れ行く空のさまを望めば、入日の上にかゝる冬雲は茶の色、もしくは茶がゝりたる赤色、低きは暗き紫色、更に低きは暗き灰色にして、南天のかなたには濃淡の分ちこそあれ凡て紫色と灰色とをまじへたる雲を見たりき。たとへば畫工が先づ一面の灰色を紙上に畫きて、その上に赤色、紫

色、もしくは茶の色を濃くも淡くも彩りたらんがごとくなりき。十二月の中旬よりは天寒く光薄く、千曲川の流も氷に閉され、淺間のけぶりもかくれて見えず、これより年を越えてことし二月の終まで、暗く寂しき雪空に日を見ることすら稀なりき。雲の眺めはすくなくして視の海も凍りぬ。

山里は雪ふりうづみて軒端のつらゝ劍のごとくなる窓のもとに籠りつゝ、靜思のいとまも多ければつくづく雲烟のうつりかはりなど心に浮ぶるに、いさゝか朝暮のけじめにも近づきたらんかと思はれし身の、更に昔よりは一層の無學にうつりたる心地もせられき。獵夫は勝者、王者のはじめといふ言葉もあれど、わが逐ふ鹿はいよ〳〵遠ざかり行くの思ありき。自然はいかやうにも解き得らるゝなれば、一合の桝にて汲まば一合ほどに、一升の桝にて汲まば一升ほどにも汲みとらるゝなり。

たゞわが汲むことの僅かに一合なりしを知り初むる時は、この一合を十度してかの一升となさむと願ふべきが理なるに、かへりて汲み得たる一合をも傾け捨てむの情あるはをかし。またしてや、わが汲むことは未だ一合にすらも足らざるをや。まして、かの自然は僅かに一升の泉ならざるをや。一斗なるをや、一石なるをや、嗚呼遂に無窮なるをや。

かくのごとき沈思は人を迷宮に誘ひ易きものなり。好めるわざなればこそ、思ひ立ちて暇ある折々のすさびとなしつれど、幼稚なる智識はいくたびかわれを失望の俘とならしめたりき。來りてわがためにこの縛を解きたるは、たゞ自然を愛慕するの情の手にてありしなり。

ことし三月の始より五月末にいたるまでは、詩歌の卷々に雲をあさらむとて、うつり行く空の眺に心を注くこともすくなかりき。たゞ春の雲につきて思ひ得たるは、高きと低きと遠きと近きとにかかはらず、なべて紅色を含めるとなりき。同じく紅色なれとも、早春の雲の含めるは底に仄めきたる紅色にして、仲春の雲の含めるは表に發する紅色なるがごとくに見えき。やがてこの紅色は暮春の紫色にかはり行く順序にてありしなるべし。

天に出沒する雲烟と地に榮枯する草木と、いかにその性質と組織とは異なれりとも、季節につれて變遷消長するさまの深き關係あることは、しばゝ心付きたるふしなりしが、今は明かにこのことわりを感ずるに至りぬ。ほとゝぎす來て鳴く頃の空を見てもしるべし、初夏の雲のまさり行くさまは、梢の青葉茂り行くがごとときなり。初夏の雲は天の若葉なり。盛夏は陽氣のきはまれる時にして萬物化育の絶頂、日近く、熱多く、

地上より蒸發する水分の豐かにして直射する光の力ある、天地はまさに奮鬪と鋭意と活動との舞臺なり、生殖と競爭との世界なり。されば鬱蒼たる綠蔭に彷徨して青空のかなたにかゝれる雲層の雄大なるを望む時は、この綠蔭とかの大雲と、其色の鋭く其影の深くして、强盛なる調子、猛烈なる表情、互に相協ふことを知るべし。初夏の雲烟と草木との關係はまた同じ。自然は夢樂しき少年の春より更に力ある實動の域に進まむとする時なれば、花霞み草萌ゆるごとき春の雲にもあらず、蔭は深く葉は覆ひたるごとき盛夏のそれにもあらずながら初夏の雲烟は若葉の綠やはらかに茂りて淸しく新しき思を送るに似たるなり。

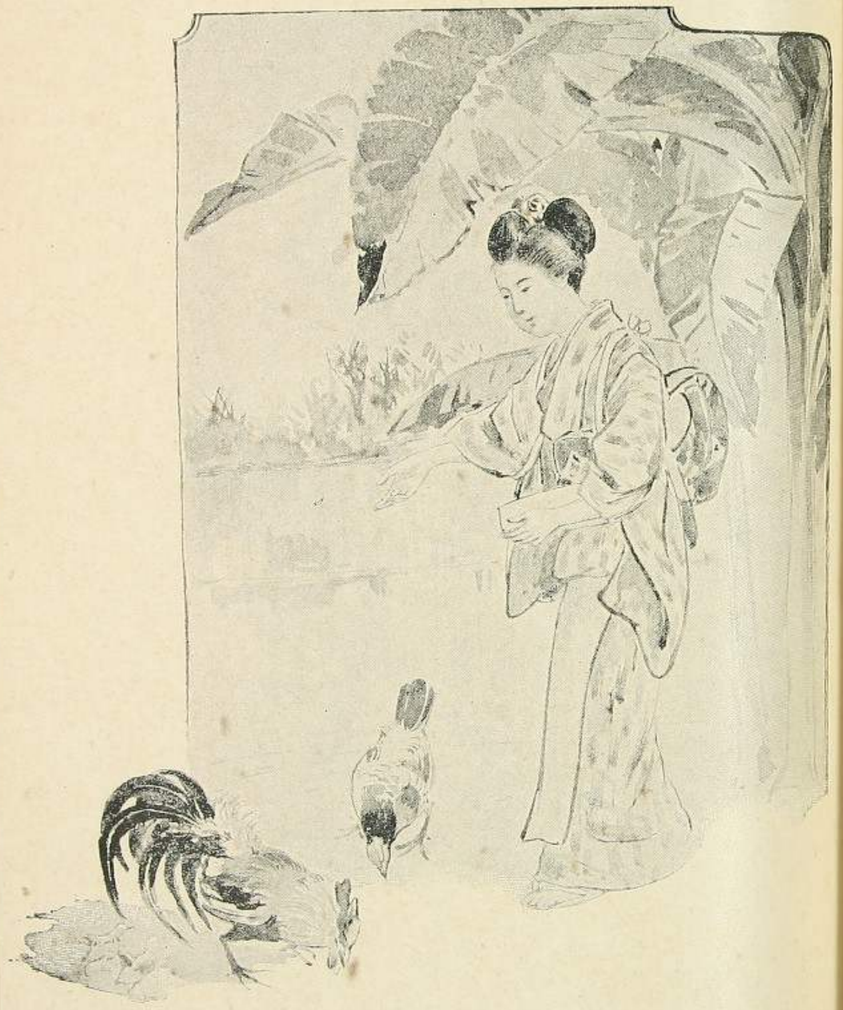
雲に對する吾心はこれより漸く一變したり。われはさきに雲と空とを別ち學ぶべきものに思へりし。今は雲と空との別ちがたきものなるを覺りぬ。さきに雲の研究といへば、形狀と色彩とにのみ行くべきものに思へりき。今は光線と空氣とよりして、別に辿り入るべき細道のあるを覺りぬ。

ラスキン古代の畫家を嘲りて曰く、彼等が雲の思想は全く一樣なりき。運筆の力と視力の正しきとによりて、多少完全なるものを畫きいでたるはあり、されど理解の力に於てはおしなべて同じからざるはなし。比較的に小さくして圓く膨れたる白體が他の圓く膨れたる白體と雜然相連り、いづれも白く輝けるかた、灰色に暗き陰、または一點やはらかなる射光とをもて、遠く蒼穹の下に浮べるものとなすは、これその思想なり。かゝるは多くの世人が雲に就きて抱くの思想のみ、そは平素眼に觸るゝところのものにつきて初等とも普通とも杜撰ともいふべき見解のみ。世人はその日分量ほどに、おそらくは

四十英尺强の大きさほどに雲を考ふるなり。大方彼等が雲を見るや、他の圓形白質なる固躰と等しき法則に隨ひて、高く青き凹圓の下に懸かれる固躰に過ぎずと考ふるなり。ゆゑに略この想を畫きいでゝ筆路流麗なるあれば、彼等は滿足して、これ自然なりと言ふと。噫あれは一とせの月日を積みて、僅かにラスキンが嘲語の滋味を解するに至りしのみ。

久保學士は山水美論にかの雲の章を紹介したるとき、空を論ずるの一節を省きたり。ラスキンが空に就きての研究は雲を開くに欠くべからざる秘鑰にして、そのうちには自然と青天の特質、青天と雲との關係、日光の現象と性質、及びその原因、其他雲影のことなどをいへるはいづれも自然の微に入りたる觀察なるに、學士がこれを雲の論に納めざりしは惜みてもあまりあることなり。われは六月に入りてより、夏の青空に望みたる水蒸氣の限りなきさま、日光と青空との關係、日沒に望みたる雲影の趣、雨雲とその雲脚との眺め、又は月夜の雲などに就き、おぼつかなき研究の細道をたどりたれど、そは稿をあらたむべきものなれば、今はこの一里塚に筆を擱くべし。

水彩畫家三宅克己氏はわれと前後して小諸に來り住みぬ。客心相憐ぶのあまり互に訪れて藝術の上など語るを日頃のなぐさめとなせり。氏はかつて西歐に遊び、名ある畫堂をへめぐりて、親しくミレエ、コロオなどの作につき丹青のあとを尋ねたる人なり。この稿を草するにあたりて、氏が物語に得ることすくなからず。こゝに併せ記すは負ふところを明にせむとてなり。



黄昏

つと立ちよれば垣根には
露草の花さきにけり
さまよひくれば夕雲や
これぞこひしき門邊なる

瓦の屋根に烏啼き
烏歸りて日は暮れぬ
おとづれもせず去にもせて
螢と共にこゝをあちこち

緑蔭

枝うちかはす梅と梅
梅の葉かげにそのむかし
鶏は鶏とし並び食ひ
われは君とし遊びてき

空風吹けば雲離れ
別れいざよふ西東
青葉は枝に契るとも
緑は長くといはじ

水去り歸る手をのべて
誰れか流れをとゞむべき
行くにまかせよ嗚呼さらば
また相見んと願ひしか

遠く別れてかぞふれば
かさねて長き秋の夢
願ひはあれど陶磁の
くだけて時を傷みけり

わが髪長く生ひいでゝ
額の汗を覆ふとも
甲斐なく珠を抱きては

罪多かりし草枕

雲に浮びて立ちかへり
都の夏にきて見れば
むかしながらのみどり葉は
蔭いや深くなれるかな

わかれを思ひ逢瀬をば
君とし今やかたらふに
二人すわりし青草は
熱き涙にぬれにけり

罪

罪なれば物のあはれを
こゝろなき身にも知るなり
罪なれば酒をふくみて
夢に醉ひ夢に泣くなり

罪なれば親をも捨てゝ
世の鞭を忍び負ふなり
罪なれば宿を逐はれて

花園に別れ行くなり
罪なれば刃に伏して
紅き血に流れ去るなり
罪なれば手に手をとりて
死の門にかけり入るなり

罪なれば滅び碎けて
常闇の地獄のなやみ
嗚呼二人抱きこがれつ
戀の火にもゆるたましひ

胸より胸に

其一

めぐり逢ふ

君やいくたび

めぐり逢ふ君やいくたび
あぢきなき夜を日にかへす
吾命暗の谷間も
君あれば戀のあけぼの
樹の枝に琴は懸けねど

朝風の來て彈くごとく
面影に君はうつりて
吾胸を靜かに渡る

雲迷ふ身のわづらひも
紅の色に微笑み
流れつゝ冷ゆる涙も
いと熱き思を宿す

知らざりし道の開けて
大空は今光なり
もろともにしばしたゝずみ
新しき眺めに入らん

其二

あゝさなり
君のごとくに

あゝさなり君のごとくに
何かまた優しかるべき
歸り來てこがれ佗ぶなり
ねがはくは開けこの戸を

ひとたびは君を見棄てゝ
世に迷ふ羊なりきよ
あゝきなき石を枕に

思ひ知る君が牧場を
樂しきはうらぶれ暮し
泉なき砂に伏す時
青草の追懷ばかり
悲しき日樂しきはなし

悲しきはふたゝび歸り
綠なす野邊を見る時
飄泊の追懷ばかり
樂しき日悲しきはなし

その笛を今は賴まむ

その胸にわれは息はむ
君ならで誰か飼ふべき
天地に迷ふ羊を

其三

思より

思をたどり

思より思をたどり
樹下より樹下をつたひ
獨りして遲く歩めば
月今夜幽かに照らす

おぼつかな春のかすみに
うち煙る夜の靜けさ
仄白き空の鏡は
俤の心地こそすれ

物皆はさやかならねど
鬼の住む暗にもあらず
おのづから光は落ちて
吾顏に觸るぞうれしき

其光こゝに映りて
日は見えず八重の雲路に
其影はこゝに宿りて

君見えず遠の山川

思ひやるおぼろ〳〵の
天の戸は雲かあらぬか
草も木も眠れるなかに
仰ぎ視て涕を流す

其四

吾戀は

河邊に生ひて

吾戀は河邊に生ひて
根を浸す柳なりの樹

枝延て緑なす
生命をぞ君に汲ふなる

北のかた水去り歸り
晝も夜も南を知らず
あゝわれも君にむかひて
草を藉き思を送る

其五

吾胸の

底のこゝには

吾胸の底のこゝには

言ひがたき秘密住めり
身をあげて活ける牲とは
君ならで誰かしらまし

もしやわれ鳥にありせば
君の住む窓に飛びかひ
羽を振りて晝は終日
深き音に鳴かましものを

もしやわれ梭にありせば
君が手の白きにひかれ
春の日の長き思を
その糸に織ちましものを

もしやわれ草にありせば
野邊に萠え君に踏まれて
かつ靡きかつは微笑み
その足に觸れましものを

わがなげき衾に溢れ
わがうれひ枕を浸す
朝鳥に目さめぬるより
はや床は濡れてたゞよふ

口唇に言葉ありとも
このこゝろ何か寫さん

たゞ熱き胸より胸の
琴にこそ傳ふべきなれ

其六

君こそは

遠音に響く

君こそは遠音に響く
入相の鐘にありけれ
幽かなる聲を辿りて
われは行く盲目のごとし

君ゆゑにわれは休まず

君ゆゑにわれは休れず
嗚呼われは君に引かれて
暗き世をはずかに捜る

たゞ知るは沈む春日の
目にうつる天のひらめき
なつかしき聲するかたに
花深き夕を思ふ

吾足は傷つき痛み
吾胸は溢れ亂れぬ
君なくば人の命に
われのみや獨ならまし

あな哀し戀の暗には
君もまた同じ盲目か
手引せよ盲目の身には
盲目こそうれしかりけれ

蜑のなげき

風よ靜かに彼の岸へ
こひしき人を吹き送れ
海を越え行く旅人の
群にぞ君はまじりたる
八重の汐路をかき分けて

行くは僅に舟一葉
底白波の上なれば
君安かれと祈るかな

海とはいへどひねもすは
皐月の野邊と眺め見よ
波とはいへど夜もすがら
綠の草と思ひ寢よ

もし海怒り狂ひなば
われ是岸に仆れ伏し
いと〳〵深き歎息に
其嵐をぞなだむべき

樂しき初憶ふ毎
哀しき終堪へがたし
ふたゝびみたゞめぐり逢ふ
天つ惠みはありやなしや

あゝ綠葉の嘆をぞ
今は海にも思ひ知る
破れて胸は紅き血の
流るゝがごと滴るがごと

浦島

浦島の子とぞいふなる

遊ぶべく海邊に出でゝ
釣すべく岩に上りて
長き日を糸垂れ暮す

流れ藻の青き葉蔭に
隱れ寄る魚かとばかり
手を延べて水を出でたる
うらわかき處女のひとり

名のれ〳〵奇しき處女よ
わだつみに住める處女よ
思ひきや水の中にも
黑髪の魚のありとは

かの處女嘆きて言へる
われはこれ潮の兒なり
わだつみの神のむすめの
乙姫といふはわれなり

龍の宮荒れなば荒れね
捨てゝ來て海へは入らじ
あゝ君の胸にのみこそ
けふよりは住むべかりけれ

銀鎖

こゝろをつなぐ銀の

鎖も今はたえにけり
こひもまことともあすよりは
つめたき砂にそゝがまし

顔もうるほひ手もふるひ
逢ふてわかれをおしむより
人目の關はへだつとも
あかぬむかしぞしたはしき

形となりて添はずとも
せめては影と添はましを
たがひにおもふこゝろすら
裂きて捨つべきこの世かな

おもかげの草かゝるとも
古りてやぶるゝ壁のごと
君し住まねば吾胸は
ついにくだけて荒れぬべし

一歩に涙五歩に血や
すがたかたちも空の虹
おなじ照る日にながらへて
永き別れ路見るよしもなし

夏の夢

また落ちかゝる白雨の

若葉青葉を過ぎてのち
緑の野邊に蝶は來て
名もなき草の花ざかり

めぐり〳〵て藪かげを
ぬつと出づれば夏の日や
白き光に照らされて
すがたをつゝむ頬冠り

離れ〳〵の雲の行く
天の心は知らねども
蛙のうたふ聲きけば
今はよろづの戀の時

かよひなれたる白百合の
畠を荒す田鼠
小高き土をふみしめて
花さくなかを逢ひに行く

利根川だより

一

銚子行の列車に乗りしは本所停車場の時計二時をうつころなりき。旅に手荷物の多きは、譬へば顔に大なる瘤のあらんよりもうるさきものなれば、いさゝかの調度ばかりを風呂敷に包みたる身輕さ、手荷物洋傘などは網棚に乗せぬ。春なれど空曇りて風いと寒ければ、玻璃窓引きしめて同車せし人々が

浮世話を聞くに、滝車の内も東海道のとはことかはり、風俗も揃はぬが多く、姿は美しけれども冠りものゝ垢付きたる、よろづ調ひたれども話の品の下りたる、中にもよき羽織きたるが興さむるほどの大聲にて鰯の不漁の噂などするさまをかしく思ふうち、こゝはいづこ市川といふに、窓より眺むれば桃の花おもしろく咲きみだれたり。氣遣はしき雲脚も風に追はれ空に動きて、雨となりゆけば、玻璃窓一面に曇りて外の景色もおぼつかなく、銚子に入るころは日暮れぬ。大新は海に添ひたる宿なり。こよひは何故とも知らずいと寝苦しく、波の音枕にひゞきて春の夜の夢もむすばず。四月二日。

二

雨戸を漏れて障子にうつれる朝日のひかり楤の若芽ほどに紅をさしてうれしけれど、風強ければ海づきのかたは雨戸とざ

したるまゝなり。ゆふべより利根川の流れて大海に落つるところを見ばやと思ひたることなれば、梅干に白砂糖添へて朝茶運び來りし宿の女に向ひ、せめては雨戸一枚なりとも明けよと所望したるに、心地よくうべなひぬ。風いと烈し。顔さし出し欄干に倚りて眺むれば、幾多の流れを合せ水を集めたる大河なれども、海に落ち入るさまの靜かさ言はんかたなし。山を繞り、野を行き、巖に激し、草を洗ひ、朝には朝の光をうつし、夕べには夕べの星を宿して、かの百川を會すといひけむ大わだつみに流れ入るさまの心安さよ。譬へば椿の花寂しき古寺に尋ね入りて涅槃の古畫に釋尊が一生の夢幻を觀たらんもの、、かんばせ美しく眠れるが如くにかの淨土に歸りたまふさまの靜かさを心に浮べたるにも似て。それは佛、これは水の流れ、それとこれとはいたくことかはりたれども、

その心安きさまは似たりなど思ひつゝ、海のかなたに眺め入りしが、宿の女の運び入るゝ膳の音に心付きて座にかへりぬ。よく〳〵の不漁なりとて魚の新しきは河のものなり。膳に松露の香もうれしく、給仕に來りし小女のいと清げに愛らしきを、年を問へばとりて十六、暮より奉公に來れるなりといふ。この日は犬吠崎に遊ばんと思ふ心のしきりなれば、里程、温泉の名など尋ね、兎や角するうちに、また空は曇りぬ。土地の人は犬吠を「いぬぼう」といへり。このあたりの言葉やゝ鼻にかゝりて聞ゆれば、「いぬぼう」もやはり訛りたるものと覺し。大新を立ち出でゝ質樸なる人々の風俗など眺めつゝ、觀音より右に折れて町のはづれに來りしころ、雨降りいでたり。かなたの小山の上に立てる一つ松も枝を垂れて雨を呼ぶかや、一むら繁れる竹の林の音するは、空の模樣に小鳥の騒

げるなりけり。畠には農夫の影もあらずなりぬ。あまりの大降となりたれば、休茶屋にかけこみて車を求めたれども、無しといふ。沈着を假裝ひ、茶を乞ひて雨の小降となるを待ちたれど、さる景色もなし。引きかへさんも口惜しや、ことに道路の悪しくして泥濘の深ければ、靴にては行くべからず、われ性質輕薄なるものなれば、かゝる些細のことにも心惑ひ、あはてふためき、休み臺に腰かけてはまた立出でゝ空の模樣を眺めしが、ふと心づきて、草鞋を求めたるに、茶屋の爺氣の毒に思ひ、おのがはきたる足袋までぬぎてかうかけにと取らせたり。紺の色さめて龜の頭の如くに足の親指の出るも可笑しけれど、情のほどうれしく、靴は手荷物にくゝりつけて出でぬ。

旅は道こそおもしろけれ。石はあれども腰うちかくるの眞も

なく、蔭はあれども休らふの情もなく、たゞ一すぢに鶏鳴く夕暮の宿を急がば、何の風情かあるべき。されば口メオは緑の樹の蔭にたゝずみ、シュリエットはあけぼのゝ露にさまよふ。班女が閨の扇、行平が烏帽子その品は變れどもいづれか旅の形見にあらざる。蚊帳に逢はぬ思を歎き、片袖にあまる涙をつゝみ、笠をしるべに俤を忍ぶといふもことわりや。それは戀、われは山水を尋ねんまでのこゝろなれども思ひは同じ。もとより旅の身にしあれば雨にもぬれなん、ぬれなばぬれよ、身はぬれそぼつとも何の道を急ぐことかあるべき。

かゝる田舍道の雨景色もまた一入なり。菜の花の黄に、豆の花の薄紫なるも愛らしく、麥の穗の長きは尺余、短きも七八寸ほどありと見ゆる畠の間を行くに、時々は道の邊にさき出でたる菫の紫の濃き薄き、げに旅人の足をもとゞめつべし。

紫派とやらんが油繪にもかゝまほしき小山を登り、靜なる樹かげの道に出づれば、農家の柴垣に鷄の羽もぬれてさびしげに立てるあり。臼つく音もきこゆ。農家の爺と婆とが心安らかに立ち働きて日を送るさまの長閑さを思ひ、かの天の網島のうちにも「爺の婆との末までも、まめで添はんと契りしに」などあるを胸に浮べて、いよ〳〵おもしろく思ひたれど、爺と婆にては語呂あしければ例の韻文にものすべき勇氣もなくてやみぬ。詩人バアンスは「スコットランド」の訛にて田舍の風情を歌ひたるためしもあれど、今の都の言葉すらそのまま詩歌には入りがたきを、まして田舍訛にて農夫が上を歌はんもむづかし、銚子なまりの漁歌もいかゞあるべきなど、かゝる思も旅の興なり。

犬吠崎には曉鷄館といへる海水浴あり。海に向ひ岩に添ひた

れば雨風烈しく吹きつけて、海づきの戸は皆な閉しぬ。人々ものうきことに思ひて、茶に親しむあり、碁を友とするあり。波の音もかく荒れまさりては耳につきてうるさし。湯に入りて心地すが〳〵しくなりぬ。猶、雨中の旅に身の勞れたれば、枕を乞ひて横になり、足なげ出して小冊子などくりひろげたれど、このつれ〴〵なぐさむによしなし。四月三日。

三

けさ晴れたれば海のほとりに出でゝ遊ぶ。玉のごとく清き小砂利を歩みて突き出でたる巖石の間をつたひ、高く危ふき岩の上にのぼりて眺むるに、白波の碎けて飛び散るさま、海潮の磯に流るゝさま、その奇譬へんに物なし。われ磯邊に遊ぶことを好みてさま〴〵の海を見たり。高知にて見しは彩色畫の麗しきにも似、須磨にて見しは墨繪の淡きにも似たり。鎌

倉にて見しは靜かに、國府津にて見しは壯なりき。小湊にて海を見しは日いと晴れたる初春にして、荒濱に海を見しは雲おもしろく空高き秋の半なりけり。それ海を窺ふは夢を見るがごとし。水底の石は數ふるによしなく、いづこをはてといふよしもなく、いづこをかぎりといふよしもなし。湖の畔のさだかに、川の底の明かなるに比ぶれば、海は荒唐として窺ふによしなきなり。海を見てかへりて心かき亂さるゝといひし人もありとかや。されど朝暮の眺めをつくして磯邊に變化のさま〳〵をあらはし、動きてはいみじき旋律を起し、沈まりてはたへなる色彩を映じ、さては心あるものをしてかの他界を窺ひ見るの思あらしむる海の姿のおもしろさ。こゝろせよ、表は潮行きかへりて大波の立ち騷ぐとも底安らかに靜かなるわだつみのさまは、かの希臘の美術の姿なりといふぞかし。花さき亂るゝ岡邊のにほひをのみよしといはゞ、われ海の香をいはむ。綠のかげ深き瀧川の音をのみおもしろしといはゞ、われ海の音をいはむ。日の光さしてらす野末の色をのみめづらしといはゞ、われ海の色をいはむ。

砂清ければ手拭にて足をはたき、滿潮の時を宿の女に問ふに、午後二時頃なりといふ。さらばそのころにこゝを出立して、海の潮をも見、磯づたひに銚子にかへらんものと語れば、せめては一週間ほども逗留せよなど世辭よく、磯づたひの道のさまなどわれに語りきかせぬ。春の光障子にさして鳴く鳥の聲もものどかに、客は出でゝ庭に遊び戯るゝあり。この海水浴に來る男女を見るに、皆な遊びに餘念なきこと小兒の如し。われも八九歳の小兒のごとくになりて庭のブランコに乘り、勞れては浴場に行きて鹽湯に入ること度々なりしかば、すこ

し上氣して頭痛み顔赤くなりぬ。かなたの部屋にて月琴の音きこえたれど調子いとおぼつかなし。

晝過ぎて銚子のかたを目ざし出で立ちぬ。犬吠が崎の燈臺は高く崎のはなに立てり。立ちくる白波も身にせまるがごとく覺えて、往來の人も絶えたれば、いとものさみし。いかに寂寞と憂愁とを友とする世捨人すらかゝる磯邊にさすらひてはいとゞ戀しくも思ふらんなど、さみしさに堪へかねてはかゝることをも胸に浮べて、一歩一歩と砂路を行くに、うしろの景色も高き岩にかくれぬ。

半道ほど行けりと覺しきころ、かなたの松かげに煙立ちのぼるさまは、たしかに漁家なり。近よれば鰯とるべき小網干したり。名も知らぬ草花の白くさき出でたるもうれしく、立ちよりて道を尋ぬるに、色黒く骨柄たくましき漁夫の、われも

銚子に行くべき用あれば伴なひゆかんといふ。こはかたじけなし、さらばとてこれより道すがら海邊の物語にうつり、大鯨を鐵砲にてうちとりしこと、この鯨のために村々の爭ひを生ぜしこと、さては白米八九斗も入るべき大鮑の話に笑ひ興じて、生れはいづこぞと尋ぬれば、われ上總のものなれど流れ〳〵てかゝる處に生業を營み、今は子も三人までなしたりと語る。上總か、上總にはわれも一と夏を過せしことありといへば、かれも故郷の空慕はしき風情のあらはれて、その餘りなき言の葉も捨てがたし。

觀音のあたりにて道は右と左とにわかれぬ。漁夫は左、われは右をとりて四時頃と覺しきに銚子の宿へつきたり。おとゝひの靜かなりしに引きかへ、けふは酒のむ客の多ければとて、騷しきこと云はんかたなし。絃歌樓下に湧きて女の笑ひ戲る

る暇手にとるごとく、隣室には花をひき碁石を爭ふ聲かしまし。四月四日。

四

都を出でしときの胸算用によれば、銚子より舟にて利根川をのぼり、霞が浦を渡りてほの〴〵と明け行く岸邊の朝景色をも見、それより滊車に乘りて布佐まで行かんとは思ひしなれど、雨空の覺束なければ、直ちに舟にて布佐まで上ることゝなしぬ。滊船宿に赴かんとて朝八時ごろ大新を出で立つに、雨深し。同じ船に乘るとて來りし五十あまりの女二人、濡鼠のごとくになりて、うちすぼめたる雨傘の軍は流るゝほどなり。一人の女われに向ひ、こゝの大師詣にとて在所より上りたるよしより、東京より來れる稚兒の姿の美しかりしまでを語り、われに夕べの宿を問ひければ大新と答ふ。よき宿なり、

その料理は名に聞えたるものなれば、在所への土產話にとてきのふの晝立ちよりたるに、僅にこれ〴〵の品なりなど女のことなればこまかきところまで指折りかぞへて語る。また一人の女われらが話の間に割り入り、そは勘定もしらぬ人のいふことよ先づこの節の高き米の價より積りて見よなど、言ひ爭ふうちに、滊船の笛高く聞えければ、とるものもとりあへず、下駄はきちがへ、腰をうごかし手をうちふりて行きぬ。舟は蒸滊機關室を夾みて左右に客室あり。玻璃窗に立ちよりて眺むるに、河の色やゝ濁りたれども猶鴨頭のみどり濃く、兩岸の春は煙のごとき雨にとざされたり。利根は漾々として平野の間を流るゝ大河なれば、木曾川の奇もなく、天龍川の壯もなけれど、水靜かにして旅人の心をひくこと多し。譬へば木曾川は草、天龍川は行にして、利根川は楷なり。西の國

の文士が紀行のふみのうちにも、よき女、よき書物、よき煙草につぎて、河のごとくこゝちよきものはあらじとかや、げに岸近く行くときには雨にこもれる柳の糸も緑して人を招くがごとく、菜の花の風情ある景色、書も及ばじ、歌も及ばじなどゝ、獨り興じてありけるに、土浦といふところにて凡そ十人計の客を加へぬ。室に入り來るを見れば、皆な年は四十より五十にあまれるほどの女にて靜かに人少なかりし室のうちも俄かに膝つき合する程になりぬ。横になりて革鞄を枕に眠りてありし商人躰の男も、この勢に目さめて驚き顔なるも可笑し。かの學事に機根を碎きて形容も衰へたるが多き女學生などゝこと變り、いづれも身躰肥滿にして、顔色つやゝかにすぐれ、中にも目だちて大兵なるは相撲にしてもはづかしからぬほどなり。老いたる人の少なき世にはあらねど、かく

うちつどひて見ればなにとなく物めづらしく、中には若きものをも凌ぐほどの勝氣なるがあり、目は鳥のごとくつぶらにしてたゞ〳〵無言なるがあり、顔色銅の如く髪の毛縮れて冷笑顔に人を見るあり、額には年波をたゝえて福々しきが人の話を聞きて煙草ふかしたるあり、かの京傳のしやれ本のうちに老婆の太夫のこと書きたるなど思ひ合されて、いと興あり。かく人々のつどひては硝子窗も曇りて煙草の煙のみ白く室に滿ちたれば、われはひとり室を立ち出でゝかの機關室に赴きたるに、車輪の響、蒸氣の音、石炭の燃え落つる音に合さりて、たやすくは人の言葉も通ぜず。烈火の前に立ち跨り、大なる鐵十能にて絶えず石炭を竈に投げ入るゝ火たきを見るに、顔は黒く髪の毛垢づき、額の汗は流れて手拭を浸したり。いそがしくもまたせつなき世渡のさまや、近きころ英吉利にも

てはやさるゝキップリングは花鳥の韻事をはなれてかゝる休みなき機關のさまを詠じ、勞働を歌ひたることも思ひ出され、かの心を煙霞風月に馳せて知らず識らず彫蟲の奴となれるものにかゝる勞働の活畫も見せまほしく、運轉手の語るを聞けば、躰格の健かなるものすら冬は八十度、夏は百度以上なる熱氣の間に立ち働きて永くこの職に堪ふるもの少なしとなり。勞働は三時間づゝの交代にて、晝夜の別ちなければ、月に六十日の勤務あるにひとしく、このごろは正月といへど休暇といふものなしと語る。すべてこの勞働に從事する者は東京又は銚子など便利よきところに家を持ち妻を養ふといへり。運轉手は身のたけ低けれども眼鋭く、口ひきしまり、水夫にまがひたる服を着けて、暮々とめぐりひゝく器械に油を與ふるさま忙しく、機關室の片偶には鍋釜などありて、十三四とも

覺しきがいと無心に茶を煮たり。かれも行く末は石炭竈の前に立つべきにや。二十あまりになりて物心づけるは、奇異なる嘆息を泄し、柱にうちもたれて死せるがごとくに眼を閉してありしが、やがてあをのけになりて板の間に仆れ、赤き毛布引き被りぬ。運轉手は戸棚より「ビィル」の小壜を取出して口うつしに飲みてありしが、出で行かんとせし吾姿を盗み見て冷やかに笑ひし。

布佐に着きたるは五時頃なりき。こゝには松岡子の家あり。兄なる人は醫を業とし、この近鄕に聞えたる家柄なれば道行くものに問ふに、かの軒端に柳の見ゆるがそれなりといふ。先ちて都を出でし友も我を待ちしこととて、吾が故鄕に歸りたらんがごとく思はれ、あつき親切のほどもうれしく、何の遠慮もなくうちくつろぎて家の人々に親しみぬ。かゝる靜か

なる家庭のうちにありて温きこと春の光の如き樂みをもてる友のうちやましさよ、とに十三四とも覺しく目ざしのいと秀でたるがわがために茶運び來るも愛らし。行末はすぐれたるひとゝもなりたまふらむ。夕暮より裏のはなれに春雨の音をきゝて、さま〳〵のことをかたる。友の弟なるひとは繪畫を好みて、年いまだ若けれども丹青の道に望をかけたり。こゝに來りて美術の上のことなどおもしろく物語り、摸寫したる粉本を出してわれに示しぬ。夢見るとも言はまほしき友の眼はともしびの光にかゞやくと覺えしに、言葉をあらためて、もと友の家は利根川のかの岸にありしこと、亡き母の性質快活にして怠りなかりしこと家には一方ならぬ歴史のありしことなどを語り出でらる。品高く姿稀なる處女すらもかゝる優に美しき感情は持てりとも覺えず、「抒情詩」にかず〳〵のよき歌

を歌せるこの友が燃え易く觸れ易き天才の花おのづと談笑の間にあらはれて、すぐれたる西の國の詩人がうら若きころのことも思ひ合されたり。この夜は三人して枕を並べ、われは二人の間にはさまりて、川といふ字になりて眠につきぬ。四月五日。

五

空猶晴れず。友の兄なる人は花をこのみて、ことしは都より草花の種のさま〳〵をとりよせ、庭に蒔きたるが、早や芽出したるものあれば、われにも來りて見よといふ。傘さして庭の花園をめぐり、春草の萠え出でたるさまを眺めぬ。この日は例のはなれにありて、雨のさびしければ友の書架よりバアンスの歌などさぐり出して讀む。四月六日。

六

ことしの春は雨多く、兎もすれば空曇りて快晴といふべき日和は少なかりしを、めづらしくもけふは雲をさまりて空の色眼にこゝちよし。かくては興も湧き上り、足も浮き立ち、友にいざなはれて利根川のほとりに遊ぶ。

見るたびごとに新しきは朽ちず盡きざる自然のさまなりけり。ことに雨をさまりての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、げにいづれも皆な緑うるはしき若葉をのべて、活きて自然の太氣を呼吸するかとうたがはる。花やかにさしてらす日の光のうるはしさよ。やはらかに吹きわたる春の風のこゝちよさよ。われは美酒をすごしたるがごとくに醉ひくだけ、心は躊躇としてこの景色のうちを行くに、松生ひ茂れる小高き岡あり。友はこゝに遊ぶことを好みて、常に來りて幽懷を遣るとかや、右左に眺め入るうち、松が根にさき出でたる一もとの

蘭の花あり。こは蘭にあらず、蕙の花なり、さるにてもその花の形の書きたらんがごとく塵もはづかしき風情のめづらしさよとて、友は花をこのむの情に堪へずや、摘みとりて黒き帽子にはさみぬ。白皙の美男が蘭の花をかざして、微笑みて松かげに立てるすがたは物語を見るこゝちもせられて、相伴ひてこの岡を下りぬ。

あしびきの山のあらゝぎ
たゞ一もと摘みてもて來て
我妹子がたもとに入れし
足引のやまのあらゝぎ
いまもなほさやかに匂ふ
あなうれしいまだ我をば
忘れたまはじ　（野邊のゆきゑ）

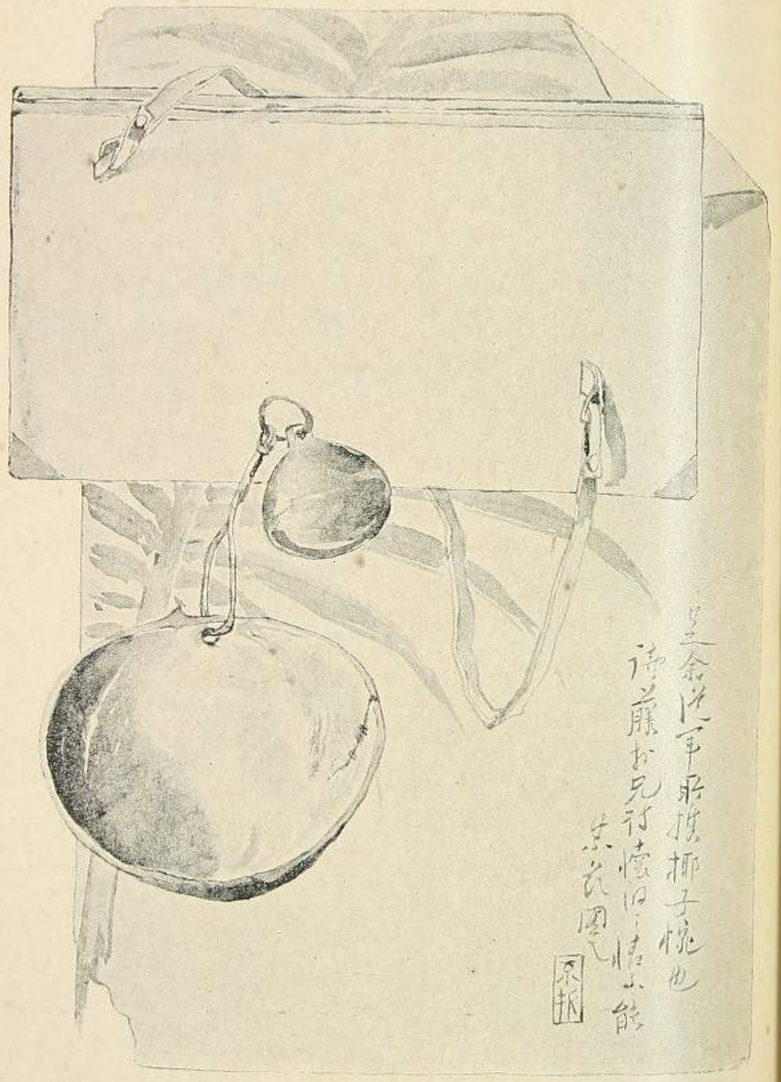
利根川のほとりに出づれば楊柳の花さき滿ちたり。高き岸に

のぼりて眺むるに、遠き山々、近き村々、いづれも一眸のうちにをさまりて、携へ來りし雙眼鏡に入る桃の花のけしき得も言はれず。蠶飼川は小貝川とも書けり。流れて利根に入るほとりは左に戸田井の柳もえ出でたるを見渡し、右に羽村の漁家を眺め、菜の花水に映りて物洗ふ女のさまも風情を添へたり。かの舟を水に浮べて「はやか」釣らんと糸を垂れたるさま、籠を脊負ひ襷の目だちたるをかけたるが椿の花のかげをうたひ行くさま、煙草のみたる農夫の心安きさま、柳に繋がれたる馬のいさましく嘶くさまなど、げに車東西にはせまどひ石炭の煙空を覆へる都の空とはことかはり、かゝる田舍ならでは見られまじき景なり。われは友と共にこなたの岸をゆき、かなたの岸をつたひて、日一日河のほとりに眺め暮しぬ。

馬を引き鋤を肩にして行く農夫のあとにつきそひ、ながめあかぬ川のほとりに添ふて歸るに、にはかに鳴き出したる蛙の聲にさそはれて、友の指ざすかたを眺むればかなたに立てる野の家あり。藁ぶきの屋根春の星を帶びてさびしきうちにも深きおもむきをそなへたるは、いかなる人の住めるにかあらむ。

神子が家のやれの草
そで子がやれの草の露
ゆふべは宿る星ひとつ
哀はれその星なつかしや

空のゆふべになる毎に
きよき姿を思ひかれ
うれしき星をまた見むと
野みちを來れば野の末に



うき世のわざぞすべもなき
さしも戀しき野の家か
雲のあなたに別れきて
みやこの市を我が行けば

漲るちりのひまさめて
むかしの星ぞ見ゆるなる
星よみやこは樂しきか
ゆふぐれきよきかの人も
見えぬ都はたのしきか

（野の家）

四月七日

椰子の實

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

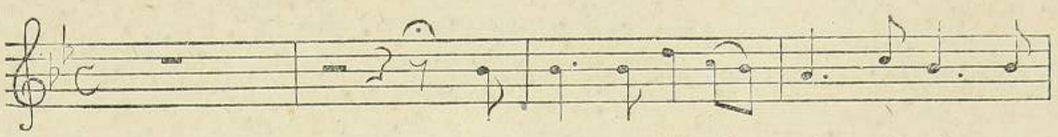
舊の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

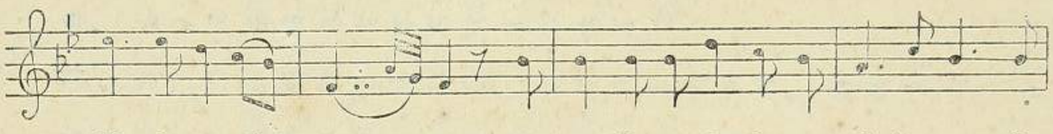
われもまた渚を枕
孤身の浮寢の旅ぞ
實をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂
海の日の沈むを見れば
激り落つ異郷の涙
思ひやる八重の汐々
いづれの日にか國に歸らん

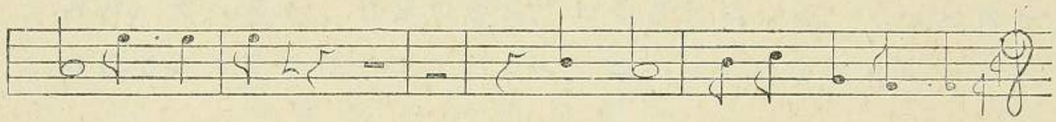
海邊の曲

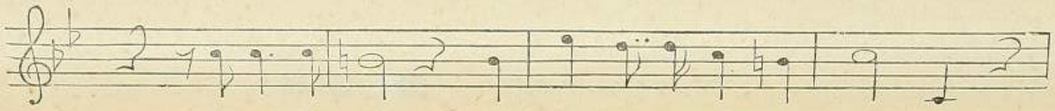
うみべといへるしらべに合せてつくりしうた

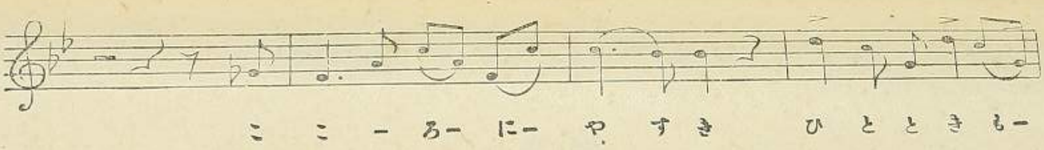
よのわづらひをのがれいでつゝ、ひとりうみべにさまよひくれば、あゝはや、わがむねは、こひのおほなみ、こゝろにやすきひとゝきもなく、くらきうしほのうみよりいでゝ、あふれてきしにのぼれるみれば、つめたきかぜの、ゆめをふくとき、とゞめもあらずなみだしながる。

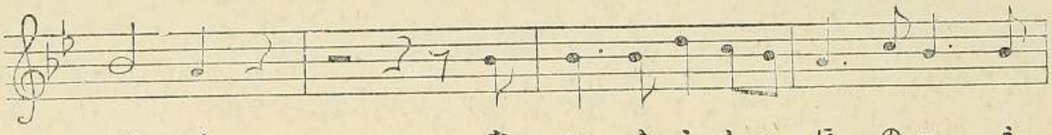

よ の ーわづーら ひを の

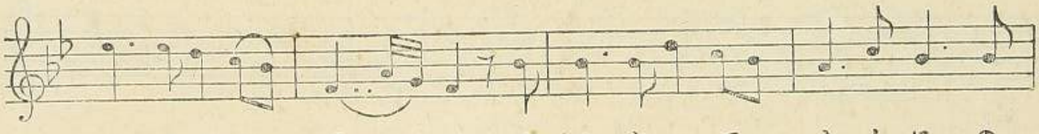

おれいでー つ ーつ ひとりーうみ ーべに ー さ


ま ーよひくれば あさはや

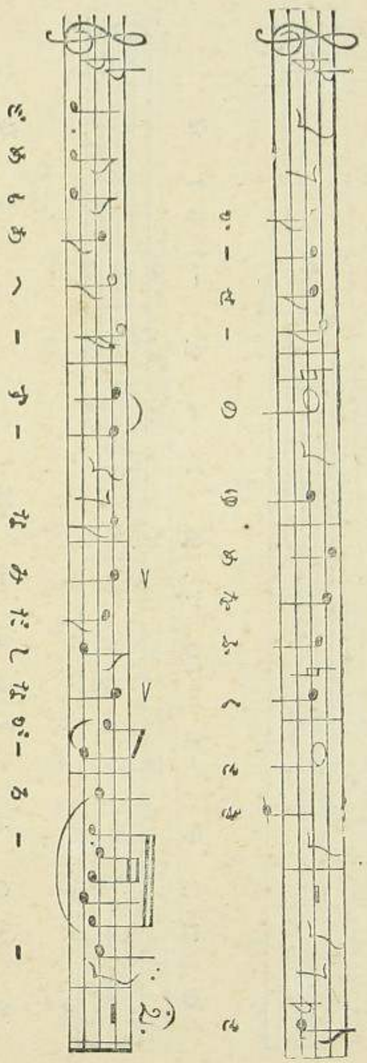

わがむれは こひのおほ ー なみ


こ こ ーろーにー や すき ひとときもー


な く たかきうしーほの ー う


みよりいー で ーてあふれーてー きしにの

ぼれるみー れば つめたーき



蟹の歌

波うち寄する磯際の
一つの穴に蟹二つ
鳥は鳥とし並び飛び
蟹は蟹とし棲めるかな

日毎の宿のいとなみは
乾く間もなき砂の上
潮引く毎に顯れて
潮満つ毎に隱れけり

やがて天雲驚きて
落ちて風雨となりぬれば
流るゝ砂と諸共に
二つの蟹の行衛知らずも

舟路

海にして響く艫の聲
水を擊つ音のよきかな
大空に雲は飄ひ
潮分けて舟は行くなり

靜なる空に透かして
青波の深きを見れば
水底やはてもしられず
流れ藻の浮きつ沈みつ

緑なす草のかげより
湧き出づる泉ならねど
おのづから滿ち來る汐は
海原のうちに溢れぬ

さながらに遠き白帆は
群をなす牧場の羊
吹き送る風に飼はれて

わだつみの野邊を行くらん

雲行けば舟も隨ひ
舟行けば雲もまた追ふ
空と水相合ふかなた
諸共にけふの泊へ

千曲川旅情のうた

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
この命なにを request 歌

明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の
消え殘る谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水卷き歸る

嗚呼古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ
過し世を靜かに思へ
百年もきのふのごとし

千曲川柳霞　みて

春淺く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繋ぐ

常盤樹

あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな

其枝に懸る朝の日
其幹を運る夕月
など行く旅の迅速なるや
など電の影と馳するや
蝶の舞
花の笑
など遊ぶ日の世に短きや
など其酔の早く醒むるや
虫草の葉に悲めば
一時にして既に霜
鳥潮の音に驚けば
一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど

大力天を貫きて
坤軸遂に静息なし
ものみな速くうらがれて
長き寒さも知らぬ間に
汝千歳の時に嘯き
獨りし立つは何の力ぞ
白銀の花霏々として
吹雪の煙闇き時
四方は氷に閉されて
江海も音をひそむ時
汝緑の蔭も朽ちせず
空を凌ぐは何の力ぞ
立てよ友なき野邊の帝王

ゆゝしく高く立てよ常盤樹
汝の長き春なくば
山の命も老いなんか
汝の深き息なくば
谷の響も絶えなんか
あしたには葉をうつ霙
ゆふべには枝うつ霰
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶうきなやみ
いづれの日にか
氷は解けて
其葉の涙
消えむとすらん

あゝよしさらば枝も摧けて
終の色の落ちなん日まで
雲浮かば
無縫の天衣
風立たば
不朽の緒琴
おごそかに
立てよ常盤樹
あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな

寂寥

岸の柳は低くして
羊の群の繪にまがひ
野薔薇の幹は埋もれて
流るゝ砂に跡もなし
夢科山の山なみの
麓をめぐる河水や
龍住む淵に沈みては
鴨の頭の深緑
花さく岩にせかれては

天の鼓の樂の音
さても水瀨はくちなはの
かうべをあげて奔るごと
白波高くわだつみに
流れて下る千曲川

あした炎をたゝかはし
ゆうべ煙をきそひてし
駿河にたてる富士の根も
今はさびしき日の影に
白く輝く墓のごと
はるかに沈む雲の外
これは信濃の空高く

今も烈しき火の柱
雨なす石を降らしては
みそらを焦す灰けぶり
神夢さめし天地の
ひらけそめにし昔より
常世につゞる白雪は
今も無間の谷の底
湧きてあふるゝ紅の
血潮の池を目にみては
布引に住むはやぶさも
翼をかへす淺間山

あゝ北佐久の岡の裾

御牧が原の森の影
夢かけめぐる旅よ寢て
安き一日もあらねばや
高根の上にあか〳〵と
燃ゆる炎をあふぐとき
み谷の底の青巖に
逆まく浪をのぞむとき
かしこにこゝよ寂寥の
その味はひはにがかりき

あな寂寥や其の道は
獸の足の跡のみか
舞ひて見せたる大空の

鳥のゆくへのそれのみか
さてもためしの燈火よ
若き心をうかゞへば
人の命の樹下蔭
花深く咲き花散りて
枝もたわゝの智慧の實を
味ひそめしきのふけふ
知らずばなよか旅の身よ
人のなさけも薄からむ
知らずばなよか移る世よ
假の契りもあだならむ
一つの石のつめたきも
萬の聲をこゝに聽き

一つの花のたのしきも
千々の涙をそこに觀る
あな寂寥や吾胸の
小休もなきを思ひみば
あはれの外のあはれさも
智慧のさゝやぐわざぞ是

かの深草の露の朝
かの象潟の雨の夕
またはカナンの野邊の春
またはデボンの岸の秋
世をわびゝとの寢覺には
あはれ鶉の聲となり

うき旅人の宿りには
ほのかに合歡の花となり
羊を友のわらべには
日となり星の數となり
麥に添ひ寢の農夫には
はつかねずみとあらはれて
あるは形にあるは音に
色にほひにかはるこそ
いつはり薄き寂寥よ
いづれいましのわざならめ

さなりおもてはは冷やかに
いとつれなくも見ゆるより

深き心はあだし世の
人に知られぬ寂寥よ
むかしいましが雪山の
佛の夢に見えしとき
かりに姿は花も葉も
根もかぎりなき藥王樹
むかしいましが沅湘の
水のほとりにあらはれて
楚に捨てられしあてびとの
熱き涙をぬぐふとき
かりにいましは長沙羅の
鄂渚の岸に生ひいでゝ
ゆふべ悲しき秋風に

香ひを送る蕙の草
またはいましがバトモスの
離れ小島にあらはれて
歎き仏るゝひとり身の
冷たき夢をさますとき
かりに面は照れる日や
首はゆふべの空の虹
衣はあやの雲を着て
足は二つの火の柱
默示をかたる言葉は
高きらつばの天の聲
思へばむかし北のはて

舟路佗しき佐渡が島
雲に戀ひしき天つ日の
光も薄く雪ふれば
毘藍の風は吹き落ちて
梵音聲を驚かし
岸うつ波は波羅蜜の
海潮音をとゞろかし
朝霜ふれば袖閉ぢて
衣は凍る鴛鴦の羽
夕霜ふれば現し身に
八つのさむさの寒苦鳥
ましてや國の罪人の
安房の生れの栴陀羅が子を

あな寂寥や寂寥や
ひとりいましにあらずして
天にも地にも誰かまた
そのかなしみをあはれまむ

げに晝の夢夜の夢
旅の愁にやつれては
日も暖に花深き
空のかなたを慕ふとき
なやみのとげに責められて
袖に涙のかゝるとき
汲みて味ふ寂寥の
にがき鹹の一車

秋の日遠しあしたにも
高きに登りゆふべにも
流れをつたひ獨りして
ふりさけ見れば鳥影の
天の鏡に舞ふかなた
思ひを閉す白雲の
浮べるかたを望めども
都は見えず寂寥よ
來りてわれと共にかたりね

響りん〳〵
音りん〳〵

響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は蹄をふみしめて
故郷の山を出づるとき
その黒毛なす鬣は
冷しき風に吹き亂れ
その紫の雨眼は
青雲遠く望むかな

枝の緑に袖觸れつ
あやしき鞍に跨りて
馬上に歌ふ一ふしは
げにや遊子の旅の情

あゝおさなくて國を出で
東の磯邊西の濱
さても繋がぬ舟のごと
夢長きこと二十年
たまゝことし歸りきて
昔懷へばふるさとや
蔭を岡邊に鶯ぬれば

松柏すでに折れ碎け
徑を川邊にもとむれば
野草は深く荒れにけり

菊は心を驚かし
蘭は思を傷ましむ
高きに登り草を藉き
惆悵として眺むれば
檜原に迷ふ雲落ちて
涙流れてかぎりなし

去ぬゝかゝる古里は
ふたゝび言ふに足らじかし

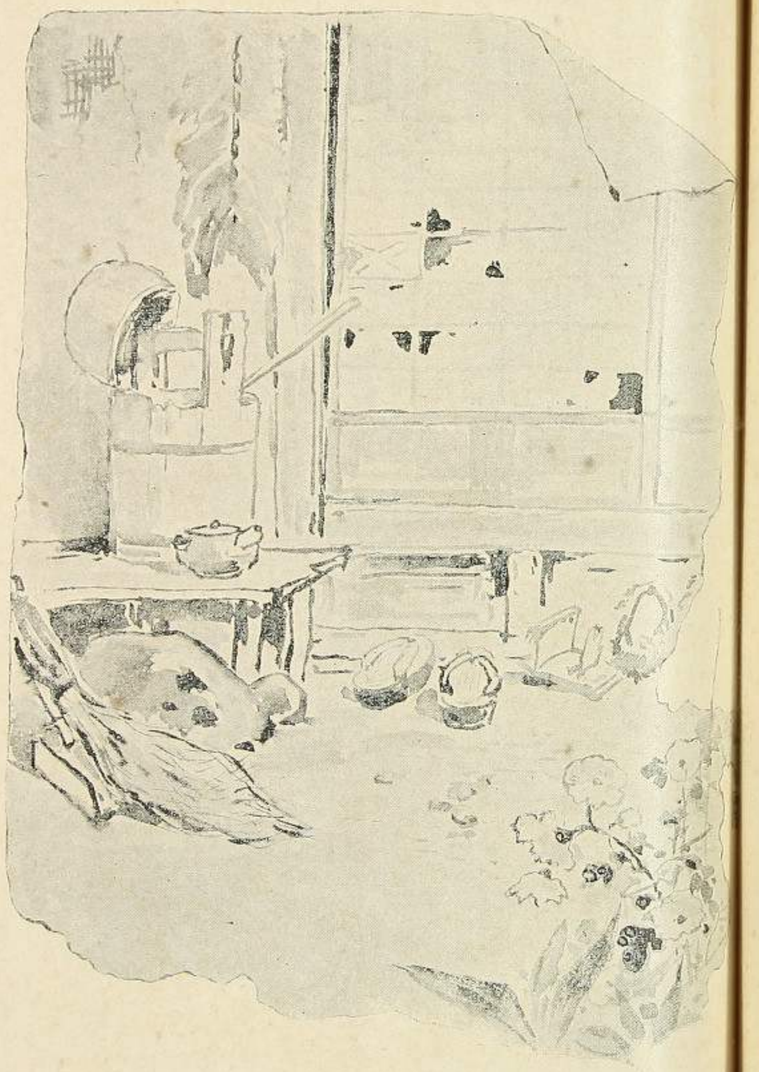
あゝよしさらばけふよりは
日行き風吹き彩雲の
あやにたなびくかなたをも
白波高く八百潮の
湧き立ちさはぐかなたをも
かしこの岡もこの山も
いづれ心の宿とせば
しげれる谷の野葡萄に
秋のみのりはとるがまゝ
深き林の黄葉に
秋の光は履むがまゝ
響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く

馬は首をめぐらして
雲に嘶きいさむとき
かへりみすれば古里の
檜原は目にも見えにけるかな

藪入

上

朝淺草を立ちいでゝ
かの深川を望むかな
片影冷しわれは今
こひしき家に歸るなり



鶺の雀のけふ一日
いとまたまはる藪入や
思ふまゝなる吾身こそ
空飛ぶ鳥に似たりけれ

大川端を來て見れば
帶は淺黃の染模樣
うしろ姿の小走りも
うれしきわれに同じ身か

柳の並樹暗くして
墨田の岸のふかみどり

漁り舟の艫の音は
静かに波にひゝくかな

白帆をわたる風は來て
鬢の井筒の香を拂ひ
花あつまれる浮草は
われに添ひつゝ流れけり

潮わきかへる品川の
沖のかなたに行く水や
思ひは同じかはしもの
わがなつかしの深川の宿

下

その名ばかりの鮨つけて
やがて一日は暮れにけり
いとまごひして見かへれば
蚊遣に薄き母の影

あゆみは重し愁ひつゝ
岸邊を行きて吾宿の
今のありさま忍ぶにも
忍ぶにあまる宿世かな
家をこゝろに浮ぶれば

夢も冷たき古簀子
西日悲しき土壁の
まばら朽ちたる裏住居
南の廂傾きて
垣に短かき草箒
破れし戸に倚る夏菊の
人に昔を語り顔
風吹くあした雨の夜半
すこしは世をも知りそめて
むかしのまゝの身ならねど
かゝる思ひは今ぞ知る

身を世を思ひなけきつゝ
流れに添ふてあゆめばや
今の心のさみしさに
似るものもなき眺めかな

夕日さながら書のごとく
岸の柳にうつろひて
汐みちくれば水禽の
影ほのかなり隅田川

茶舟を下す舟人の
聲遠近に聞えけり

水をながめてたゝずめば
深川あたり迷ふ夕雲

鼠をあはれむ

星近く戸を照せども
戸に枕して人知らず
鼠古巣を出づれども
人夢さめず驚かず

情の海の淡路島
通ふ千鳥の聲絶えて
やじりを穿つ盗人の

寝息をはかる影もなし

長き尻尾をうちふりつ
小躍りしつゝ軒づたひ
煤のみ深き梁に
夜をうかゝふ古鼠

光にいとひいとはれて
白歯もいとゞ冷やかに
竈の隅に忍びより
ながしに捜る駿の骨

闇夜に物を透かし視て

暗きに遊ぶさまながら
なほ聲無きに疑ひて
影を懼れてきゝと鳴き鳴く

問答の歌（少年のためにとてよめるうた二首）

其一

梅は酸くして梅の樹の
葉かげに青き玉をなし
柿甘くして柿の樹の
梢に高くかゝれるを
君は酸からず甘からす
辛きはいかに唐がらし

こたへていはく吾とても
柿の甘きを知れるなり
梅の酸きをも知れるなり
たゞいかにせむ他の上に
吾は拙なきものなれば
生れがならに辛きなり

二つの味を一つ身に
兼ぬべき世とも見えざれば
のたまふ酸きと甘きとは
梅と柿とに任せおき
吾は一つを樂みて
せめて辛きを守り賴まん

其二

昔、昔、駒鳥の
籠の中より言ひけるは
烏、烏、飛ぶ烏
吾窓ちかく來れかし

樹枝は君の枕かな
青葉は君の衾かな
行くも歸るも思ふまゝ
君が身こそは戀しけれ

われは深山を想ひいで
籠に涙をそゝぐ身ぞ
小暗き窓に眺め倚り
風と雲とを暮ふのみ

籠の外なる鳥鳴き
鳥答へて言ひけるは
善く歌ふ人善く愁ふ
な哀しみそ駒鳥よ

君は寵兒と愛でられて
今や榮華の籠の中
吾は寂しき樹の蔭に

獨り友なき籠の外
清しき聲のなかりせば
君は嘆きも見ざらまし
甲斐なきものと思ひきや
吾身の幸を今ぞ知りぬる

鳥なき里

鳥なき里の蝙蝠や
宗助鍬をかたにかけ
幸助網を手にもちて

山へ宗助海へ幸助

黄瓜花さき夕影に
蟬鳴くかなた桑の葉の
露にすゞしき山道を
海にうらむや幸助のゆめ

磯菜遠近砂の上に
舟干すかなた夏潮の
鰺藻に響く海の音を
山にうらやむ宗助のゆめ

かくもかはれば變る世や

幸助鍬をかたにかけ
宗助網を手にもちて
山へ幸助海へ宗助

霞にうつり霜に暮れ
たちまち過ぎぬ春と秋
のぞみは草の花のごと
砂に埋れて見るよしもなし

さながらそれも一時の
胸の青雲いづこぞや
かへりみすれば跡もなき
宗助のゆめ幸助のゆめ

ふたゝび百合はさきかへり
ふたゝび梅は青みけり
深き緑の樹の蔭を
迷ふて歸る宗助幸助

七曜のすさび

木曜日の散歩

四とせこのかた吾家に養はるゝ小犬あり。總じて犬の名に佳きは稀なれど、わけて吾家のは前の飼主の名けたるがまゝにジョンと呼べり。ジョンにてはいかにも西洋の子供めきておかしけれど、其儘呼慣れては耳ざはりとも覺えず、その性質

怜悧柔佞なるものなれば、畜生ながらも能く人の言葉を聞き分け、深く人に懷きて、家のものゝ門を出づるを見つけては常に尾を振り耳を動かして附き隨ふを好めり。われ日頃散歩を好みて、青き空を眺めては快活なる思を養ふが樂みなるに、まして日の光の美しく柳も眉にこもりたる風情の得も言はれぬこのごろ、胸を洗ひ鬱を滌がばやと例の如く吾家を立出るに、庭の椿の影に眠れりと思ひしジョンは逸早く吾足音を聞きつけて、走り出でぬ。こは失策たり、またうるさきことの多かるべしと思へは、手を振りて見すれど聞き入れず、追へども歸らす、心地よき春風に白き頭の毛を吹かせ、長き耳を動かし、勇ましく尾を振りて來るさまの愛らしければ、ふと心變り、ジョン引連れて行くもまた一興と、伴ひて出ぬ。この日は木曜なり。

歌舞伎のがはに立ちて寫實の作を殘されし默阿彌翁が、世態に心を注ぎて極めて細やかに風俗を觀察せしは、その世話物を讀みても明かなることながら、まだ年若くて賣出しとも言ふべき頃、流石に人目のつゝましく、黑の頭巾を冠り、町の末、巷のはてまでも觀めぐり、夜鷹蕎麥の言ひ捨てたる戯言まで泄さず手帳のはしに書きとめたるよしなど思ひ出づるにつけて、かの西の國の畫伯が晝夜色彩に心を碎き、辻に立ちて往來する美しき女の髪の毛のやはらかに目ざしのすぐれたるを寫しては一帙の寫生帖をなせりとかや傳ふる物語も思ひ合され、さるほどの名匠が苦心のほども慕はしく、ションを呼びながら猿飴より折れて湯島の通を行くに、さすが春なれば白き淡雲の青空にかよふあたりよりさしてらす春の光の並樹の柳の枝を泄れて、消防分署の櫻もすでにさかりとなれり。

をりふしのうゝりかはりとそと古き書にも記したるはことわり、花さき鳥歸るをりふしの變遷のみに限らず、世態の春秋もまた動きてとどまる時なし。變遷といふこと吾胸中に往來して、鏡に映れる物の象のごとく彼事是事と思ひ合するに、今の世の風俗は表花やかに進みたるが如く見えて實は裏さびしく亂れたるにあらずやと、われは思へり。

それ一代には一代の好尚なくてかなはず。買過ぎたる眼もて視れば、なべてのもの改良の名に背かずして、西歐の文物も程よく調和し、和七漢五歐三ともいふべき程に進歩の翁が七加減の妙を稱すべきかなれども、そはあまりに懷中の見えたる話なり。ペンキ塗の家は黑光の土藏と甍を並べ、重くるしき赤煉瓦は瀟洒なる格子造と軒を連ね、衣服調度のさまもまち〳〵にて、禮服と平常着との差別すらも嚴めしからず、淡

泊に手輕に事足る世なりと言はゞ言ふべきも、指して明治の趣味を見よと言ふものあらばいかになど、われながら思はざる理に落ちて、つく〳〵と町行く若き男女の姿などを眺むるにつけても、これを元祿の昔に比ぶるに、世を擧げて大遊するほどの無分別もなく、少年は早く大人の智惠つきて、凡そ若々しく、新しく、力あること稀なる時とはなりぬ。見よや祭禮には軒端に提灯を掲げ紅白の花を飾り金銀の短冊は風に翻るとも、今は幼きもの〻遊戯に落ちぬ。歌舞伎は昔の幻にして今の夢にあらず、宮殿寺院の神佛も今は老いたり。畫工はなにを材としてその色彩を發すべき、詩人はなにを捉へてその情緒を托すべき。あはれなる世かな。

ションは吾心をも知らで、心地よげに尾を左右にうちふりつ、或は後になり、或は先になり、前足にて道路の土を掘くさまも勇ましく柳の樹電信柱などのもとに行きてはその鋭き鼻にて何事をか嗅ぎわくるの風情あるもおかし。たくましく恐ろしき犬に逢へば影の如くわれに添ひて、ひそやかに歩み行けど、また女犬と見れば差別もなく耳のほとりに言ひ寄り、尾のあたりを嗅ぎて、別れがたき樣したるもうたてし。

この日は町々をそゞろあるきして、兎や角と風俗のさまなど眺め入りしが、思へばいづれ風俗は亂れ易きものなり。されば社會の高きに位して國民の好尚を光あるかたに進め、醇雅なる趣味の基となりてこの俗を誘ふの道なしとせば、いと心細きことならずや。國を建てまつりごとを行ふの高く正しきわが日の本なるを思ふても知れかし、かく明治の好尚の亂れ行きて勸奬の道乏しきは、その責社會の高き階級に位する人々の上に多かるべきなり。凡そ今の時ほど華族の光なきは

あらじ。かく言へばわれら市井の間にありて上を讒るがごとくに聞ゆれ共、香を放ち、光を照し、一代の好尚を導くべきやんごとなききはに位しながら、今の時の華族が高邁雄大なる權威に乏しきとの事實なるをいかんせんや。こゝに言ふ權威とは巨萬の富あるをいふにもあらず、下層の人民を厭倒して私意を恣にするの謂にもならず、別に世を貫く精神の熾なること烈日のごときものありて、民衆の風俗を照すべき明光の花やかにさし照らすをいふなり。

かく思ひとりて、ふとジョンを見失ひたれば口笛吹きて呼ぶうちに、いづれも白き馬に乘り、塵を蹴立て、こなたに來る二三の若き貴公子あり。氣も昂からず、姿もおごそかならず、うちあげたる鞭も力なくて、綠うるはしき柳のかげに見えずなりぬ。

金曜日の懷舊

君は水上の梅のごとし花水に浮で去こと急なり、妾は江頭の柳のごとし影水に沈でしたがふことあたはずと、諳じたる古句を口吟みて鳴く音うれしき鶯橋を渡る。この日友の許を訪れたるに家に在らざりければ、そのまゝ歸らんも本意なく、町々の雨後のさま觀めぐりて行けば綠新にして大路の塵もをさまりぬ。南の吹く日には行く人煙のごとき砂ぼこりに苦しむ都の巷なれども、雨晴れたる後にはまたかゝる靜けさもありけるよ。こゝちよき思に滿ちて春の空の麗しきを樂むに、何故にやあらん心遽かに三とせの昔にかへり、譬へば古き繪卷物くりひろげたらんがごとくに、過にし昔のこと明らかに

心に映りて夢のごとき心地もせらる。暫く懷舊の情にまかせて、嫁入橋をすぎ、六角坂を上る。かつて眉山君がすまひせしほとりへ來るに、家はことごとく取毀ちて、なにがしとかやいへる華族が西洋風の別莊いかめしく建てつらねたり、工事いまだ終らず。かしこの材木積み重ねたるほとりは、もと靜かなる丸窓のありて、かの闇潮を草したるところならんか、こゝの切石あまた置き並べたるほとりは友を會して談笑せしところならんかと思ふにつけても、そぞろに舊なつかしく、志ばし佇立みてありしが、人に見とがめられんもうしろめたくて坂を下りぬ。本郷のかたにひきかへし、柳町を過ぎて行くうちに、見ればこゝは樋口氏が故家なり。柳のみどり色かはちねど、げに物言はず、昔を語らず。境によりて情を生じ、情によりて境を思ふとかや、笑ひ興せし物語今も猶耳に殘りて、志ばしの間さびしき門邊にたゝずみぬ。人去り年過ぎては春の夜の夢のごとし。

土曜日の音樂

然り、と上野の樂堂なる西側の廊下にて、われはひとりの友の肩をたゝき言葉をつゞけぬ。同じく西歐の趣味を傳ふるものなれども音樂は他の美術と大にことかはりたるふしあり。繪畫彫刻のことは志ばらく言はず、文學の上にとりて考ふるも、詩歌にまれ小說にまれ戲曲にまれ一旦我國語に飜譯したる後ならでは、讀者にその趣味を傳ふることかなはず。小說の飜譯には驚くべき成効をなせるもあれど、詩歌に至りては東西言語の組織性質いたく異なりたれば、美妙なる聲調を傳

へんことは難し。總じて飜譯には飜譯の妙もあれど、直ちに原作を味ふものゝ目より見れば、あきたらぬふしも亦た少なからず。時には其の形のみを傳へて、香もうせたる花をかぐの嘆あること多し。音樂はしからず、異なりたる言語をもて飜譯するの困難なければ、彼の用ゆる樂器は我も又用ゆべく、その趣味をとり來りて、直に聽衆の心に傳ふるを得るなり。われは廊下の白壁にもたれてかく語り出でたるに、友は玻璃窓に倚りて庭のかなたに殘れる紅き桃の花の繪の如くなるを眺め入りしが、にはかに身を起して、かく言ひぬ、げに君の言ひたまふがごとし。西の國の文學も、繪畫も、宗教も、哲學も、多くは皆な男子の手によりて傳へられたるに、ひとり音樂のみは女性によりて吾國に傳へらるゝも奇ならずや、今の藝術の國に於てつぎつぎに名媛のあらはるゝも樂界のみな

りと。かく語るうち、演奏の開會を報する鐘鳴り響きければ、友は別れてかなたにゆきぬ。

この日の演奏を聞かんとつどひ來れる人々早や滿ちたれど、樂堂のありさま、いはんかたなく靜かなり。ことしの春は雨がちにて艶なる日和のつゞくことも少なく、兎もすれば空曇りて花も嵐に散りすましたるほどなれば、あすの土曜もいかゞあるべきなど、いづれもこゝろをなやましたるに、この日はうらゝかに晴渡れり、若葉を泄れて蒲萄染の窓掛の間よりさしてらす春のひかり演臺の正面に高く刻まれたる壁上の古琴にうつりて、白聖の色もうるはしく見えたり。きのふの夕暮、新たに獨逸より着きたるピアノを演臺の上に置き並べたるが、漆色の嚴疊作にて、脚はきら〳〵と光りたるさま、足のみは金色なる黒色の獅子の力を入れて立てるにも似たり。

人々の目をひきぬ。

序はルスチンゲン、ワイベル歌劇の「ブロ、オグ」を以て始まれり。オットオ、ニコライが「ウヰンナ」の官劇部をやめて、伯林の官劇部に轉ずるとき、告別の演奏會に臨みて始めて世に披露せし曲とかや、陸軍軍樂學校諸氏が吹奏樂なれば銀色の「フリユウト」は金色の「バス」の喇叭に映り、きら〳〵と光りかゞやきて、大太鼓のとゞろき渡れる、「シンバル」の銀の鈴のごとくに鳴りひゞける、早やいみじき藝術の國に遊ぶかと思はれたり。序につぎて納所氏の獨唱あり、伴奏は幸田氏なり。歌を「夢の小蝶」といふは、中村氏の作にかゝる替歌にて、元歌は「旅のうた」なり。メンデルソオンの集よりとれり。おほかたの樂藝に思ひ合するに、唱歌は演契會のうちの花ともいふべきなり。其趣よりいへば、こゝに獨唱のあるは譬へば戯曲に獨

語のあるがごとし。かりに第一部を第一齣と見よ、「クラリオネット」、「フリユウト」、「トランペット」など出でゝさま〳〵の白をつくし、物語の端緒も既に開らけぬ。獨唱のこゝに入りたるは俗に立役の出でゝ腹藏なく心の中を言ひあらはし、運命のさま〳〵を語るにも似て、かの深夜欄干に倚りて涕涙滂沱たるマンフレッドの蒼鶻にはあらずとも「問ふ人もなし、春の夕、」より、「曉の鐘に、花ぞ、ちりかふ」まで正且が花實をつくしたりともいふべきにや。「夢の小蝶」につぎたるは、ヴァイオリンの聯奏なり。ブライムは賴母木氏、添は幸田氏、曲はバンス、シットの「ヂユエット」第三番（二）短調なり。ブライムは鼠色の裾摸樣に藤の無垢をかさね、紅葉の色したるヴァイオリンを彈きたり、添は矢羽子つなぎの藤色に薄鼠をかさね、秋蔦の色の濃きに黒斑入りたるヴァイオリ

ンを持たり。いみじく彈きいでだるさま、物語に見るほどのことも思はれて、はなやかにきよげなり。第四は唱歌。唱歌は四部合唱。甲の「歸雁」は元歌は「遊子の夜の歌」、乙の「可憐女」は元歌は「乙女のなげき」、前の替歌つくられたるは由比氏、後のは中村氏の作なり。高音部は安達、幸田、河合、植村、神戸、堤、石井、田中、佐藤、中音部は高木、林、石黒、三上、永井、次中音部は瀧、鈴木、益山、岡野、渡邊、低音部は石野、栗本、川添、入江、高折、中村の諸氏なり。次中音部と低音部とは制服を着け、高音部と中音部とは思ひ〳〵なるをかさねたり。西の國ぶりなれども姿は大和歌をかりて若き人々が唇より發する合唱なれば樂器の力を借るものとはことかはり、その歌は人間自然の聲にして、皆な心胸より出づる響なり。かの叙情詩のごとくに、その區域こそ狹けれ、聽衆の同情を牽くはこの妙味の

あればなるべし。高音部は花やかに、中音部は明らかに、次中音部は深く、低音部は重々しく、あるひは離れ、あるひは合し、「誰が爲と織れるきぬぞ、あくるより暮るまで」に終る。次にはヴァイオリンの合奏あり。甲は「アンダンテ、カンタビイレ」、乙は「タランテレ」、共にエベルハルトの曲なり。第一部はマイエルベエルが「デル、プロフェット歌劇」の一節にて納めたりしが、こは軍樂學校諸氏の吹奏樂なり。五分おきりの休憩には人々吸煙室に趣きて思ひ思ひなる評を語りいづるさまなり。廊下には微笑みつゝ窓に倚りて立てるあり、狂氣のごとくになりて歩み廻るあり。奏樂堂より見れば吸煙室を漏れて出づる煙草のけむり渦の形をなして、白く廊下に滿ち渡りぬ。

第二部は橋本、瀧の二氏がピアノの聯彈にて始まれり。曲は

ベトオヴェンが九番ある「シンフオニイ」のうちの第一番なり。西暦千八百年の四月、世に公けにしたるものにて、ベトオヴェンが三十歳の頃の作ときこゆ。その月の二日、第一の水曜に「ウヰンナ」の「バルク」座にて演奏會を催せし折、目錄のうちの最終にはさみて、始めてこの名手が彈き試みたるものなりといふ。この曲はレンツが所謂彼の創作時代の三期のうち、初期に入るべきものにて、大家モザアトの樂風を慕ひたるころの作なり。されば、ハイヅンが「シンフオニイ」の句のはなれ〳〵なるにひきかへ、銀の鎖のつながりたるに譬へらるゝは是なり。ピアノ聯彈に次きて、四部合唱は、甲は「春の歌」、乙は「進軍の歌」。「春の歌」は鳥居氏の作、「進軍の歌」は大和田氏の作なり。第九はヴアイオリンとピアノの合奏にて、ヴアイオリンは幸田氏、伴奏のピアノは内田氏なり。曲は千八百二年に出板せしベトオヴェンが（イ）短調の「ソナタ」にて、こはリヒノスキイに呈したるものなりと傳ふ。年まさに三十二歳の作ときこえたれば、曲の花やかに壯なるはいふまでもなく、年月のたくみをかさねて、今こゝに彈きいづるさまあざやかに、ともに同じやうなる春の花のかたちしたるをかざし、伴奏は鹿の子模樣の鳩羽色なるを着たり。合奏につぎたるは二部合唱なり。高音部は幸田、安達、河合、中音部は高木、堤の諸氏にて、元歌は「賛美歌の一篇」とあるを、替へて「葵の祭」といへる歌に作り、メンデルソオンの曲に合せたるは鳥居氏なり。遠山氏がピアノの獨彈は目錄の第十一にすわり、この日の軸なり。曲はステフエン、ヘルレルの編にかゝれるシユウベルトの「ディ、フオレレ」を選みたり。ヘルレルは獨逸を週遊し、巴里に住ひ、英吉利にまで渡りたる樂

人なり。この曲は「ラ、ツルウッ」とて、世に名あるものにて、千八百十七年の作にかゝるといふ。日のひかり花やかにさし入りたれば、堅縞の風通を着て、新らしきピアノにうちむかひたるさま、いみじき指のはこびのほども、くもりなく見ゆ。終には軍樂學校諸氏の吹奏樂ありて、ウンラアトの「カアル王進行曲」いと賑やかに、かのたくみなる漁夫が大海に網うちたるがごとく、たゞり持ちたる一すぢの綱にて、次第にこの日の演奏を納め畢りたるはめでたし。

日曜日の談話

彫刻家　かくいふを許したまへ、君の顔色は常のごとく快活ならず、君が言葉の調子も亂れ勝にて、清しき眼の光りもにぶらきたり。君の精神はいたくうれひわづらへるにあらずや。君はこの二とせの間、殆ど油畫の筆をなげうちて、物思ひにのみ沈みたまへり。ミレエが農夫の摸寫を作らんとて、用意せし下繪はいかゞせし。わがために鎌倉の海を畫かんと約したる、かの水彩畫はいかゞせし。けふこのごろは藤の花も行く春の艶なる色をしめして、歩めば新しき青草を踏み、仰けば快ちよき青空を見、梢といふ梢、枝といふ枝、いづれか綠を競ひおりふしのうつりかはりをうつさゞるはなきに、君はまたなにゆゑに一枚の「チョオク」畫すらも作り給はざる。

畫工　げに君の言ひたまふがごとく、われはこの二とせの間、一枚の油畫すらも作らざりき。われは自ら畫工なりや、果して畫工となるの質ありやを疑ふなり。

彫刻家　ふさはしからぬことを聞くものかな。静かなる心に歸りたまへ、男らしき望みをかけたまへ。甲斐なきくりごとはこゝろざし弱き女も言ふものを。

畫工　さらば藝術の境にたゞよひて、身には幽なる燈火ほどの光もなきとき、苦悶と憂愁とを身に荷ひて、寫すべからざる悲哀のもとに仆れ伏すものあらば、君は微笑みて、女々しきものと言ひ消したまふか。

彫刻家　然り。

畫工　さらば思ふほどの製作を就成することもかなはで、色彩の花は早く落ち、表情の匂もうつろひ、およそ戰ふほどの矢も盡き、劒も折れ、おのが運命のつたなくあやしきを哀しむものあらば、君は微笑みて、女々しきものと言ひ消したまふか。

彫刻家　然り。

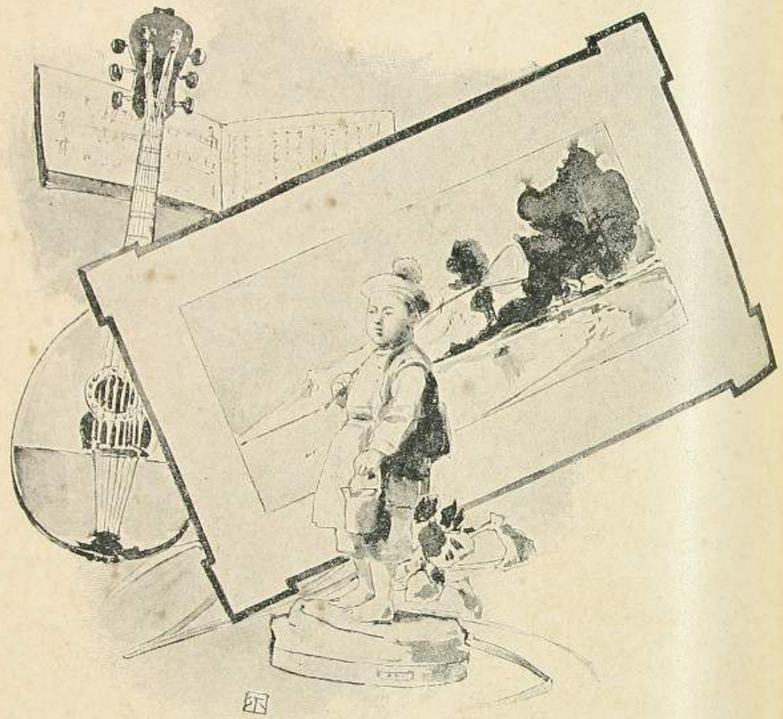
畫工　さらば潮の急きこと今日のごとき時世に逢ひて、高き望みと深き志とはありながら、又た藝術の波に漂ふほどの花やかなる心もありながら、緣淺くして契を美術の神に結ばず、空しく溺れたる畫工の苦しめるを指し、君は微笑みて泳ぐことすら知らぬほどの愚かしきものと言ひたまふか。

彫刻家　然り。然りといふは、實に君の心を知ればなり。いかに不幸なる美術家の比喩をひきて君は自ら溺れたりと云ふとも、われは信ぜじ。矢は盡きたり、劒は折れたりといふとも、我うけがはじ。自然に遊び美術に戯るゝほどの名匠を心の的にはさだめながら、君は自ら暗黑なる牢獄を作りて、自らその中に入りたまふか、あさまし。君と共に學

べる畫工のうちにて、君のごとき明かなる色彩を發するものはなかりしにあらずや。友は皆な枯れたるがごとき人體の寫生畫を作りしころ、君は獨り能く活きたる肉色を畫けりといふにあらずや。

畫工　君はわが昔を知りて、わが今を知りたまはざるなり。はじめて美術に志し、油畫を學びし頃の昔を思へば、見るものとして新しからぬはなく、聞くものとしてめづらしからぬはなく、友をも師をも驚かしたる肖像畫さへ作りしなり。罪なき學友が遊惰に日を費すの間にも、われは詩人がつくりし歌集の卷々を繙きて、おほかたの世のあはれも知り、自然の秘密をも捜り、未はいたましきが多き天才の事業をも譽をも認めたりき。ひたすらに繪畫を好めるの心にほだされて、あるときは九夏三伏の暑さにも砂に座り草に

伏して獨り寫生に心を碎き、あるときは嚴冬の寒さにも風に吹かれて筆持つ指の凍るをも覺えず、よしや願ひは身にあまるほどなりとも、この志果さでは措かじと思しに、君よ、笑ひたまふなかれ、そは皆な昔の夢なりき。ラファエルが趣味の醇雅なるも、アンゼロが理想の高邁なるも、今は吾身に用なきものとなれり。さま〳〵の美しき姿、妙なる形、そは吾心の中に想ひ納めたることも、筆を握りてかの「カンバス」にうちむかひては、すべて空しき夢の如くに、消えうするなり。同情の思も、友愛の情も、今は吾身を離れたり。友も今は用なき身なり。食ひもし飲みもする吾身なれども、わが精神はすでに死せるなり。獨りさみしく靜かなる樹蔭にありて、過こしかたを思ひめぐらすごとに、なにゆゑに自ら畫工となりしやを尋ぬれば、熱涙流れ



小川一眞製

出でゝ吾袖をうるほすのみ。かはりはてたる吾身かなや。

彫刻家　あはれなる物語をしたまふかな。すぐれたる心を持ちたまふ君にして、かくもまた思ひ亂るゝにや。靜かに明かなる心を備へざれば、美術の間に身を置くあたはずと昔の人も言ひ。われのみはと思ひあがりたる、えせものゝ上はしらず、まことの美術家たらんほどの人々を見たまへ、誰か自ら書工なり、詩人なり、はた彫刻家なりと心に諂ふべき。麒麟兒などゝ世にもてはやさるゝ人々を見るに、大方は自己にほれ過ぎ、藝術を輕く思ひ、人目に花やかなることをのみめがけて、序幕の主人公に生涯を終るが多きなり。行く末は美術の上の立役にもすわるほどの器量を持ちたまひて、君はなにゆゑに昔の夢をのみ思ひわづらひたまふや。こゝろせよ、いさゝかなる研究をこゝろみし幼稚な

る製作をとりいでゝ、小成に安んずるほどの君としも覺えず。空しき夢にそゝぐの涙もあらば、なんぞ活きて湧きいづるまことの泉にはかへたまはざる。ひたすら憂愁の同じきを繰返すほどの暇だにあらば、なんぞ羽袖も輕き蝴蝶の自在を身に抱きて、藝術の精華の露を吸ひたまはざる。

君よ、何をか躊躇したまふ。君は畫を學び、われは彫刻を修むるの學生として、共に美術の途に上らむことを願ひたまはざるや。げに、われは饒舌にのみ耽りて、盃を勸むることすら忘れたるよ。干したまへ、その酒は早や冷めつらむ。

月曜日の手紙

春も暮れゆき候。大久保の躑躅、藤寺の藤、それ〳〵に日取まで定め置きたる約束すらことはり、四五日このかた心地すぐれず引籠り居り候へば、先頃拝借致し候御珍藏の傳奇などくりひろげ、御蔭を以てつれ〴〵を慰め居り候。友人の御噂さによれば歌書あまた御手に入れられ候由、定めし堀出し物もあらせらるべく、おもしろき歌話も有之候はゞ、是非拝見致し度候。昨日はまた新躰詩につき精緻なる御高論難有拝讀いたし候。只今あたりに人もなく候まゝ、手近きそれ〴〵の書につき静かに思ひ出しまゝを記して、御返詞にまで御覽に入れ候。仰のごとく、創設の時にある詩界の今のありさま、

これを山野の開墾にたとふるに、伐木の丁々として斧うちふるふ音もきこえ、これを家屋の建築にたとふるに、石を割る鑿の響耳に徹するほどに候へば、いづれの時か百花さき亂れ、芳草生ひ茂り、人も住み、詩の神も宿り、おのづと旅人の足をもとゞめつべきほどの香世界とはなるらんなど思につけても、曉の風、夢を襲ひ、夕べの雨、心を驚かし、時には斧を捨つる杣人の嘆き、鑿を投つ石工のかなしみもまのあたりに有之候。おほかた今の時の韻文といひ、新躰詩と申すほどのものは、皆な杣人が額に流るゝの汗、石工が掌に握るの膏にて候。君が國語の性質と新躰詩の形式につきての御議論も尤に御座候。成程、正しき形式の堝壺に投げ入れ、嚴しき格調の火中に置きて、わが國語を淘冶せば、あますところ幾干の詩の純金ぞと、君が痛罵もさることながら、しばらく朝鳥の

鳴く音にまかせて、ぼの〳〵と白みゆく詩天のあけぼのを待つの外なかるべく候。君が御愛吟のうちに、武島羽衣氏の作あまた入り候よし。武島氏のうたは、よみ口沈つき、自然と位そなはり、花やかなるうちにもおのづからあはれのこもりて姿のとゝのひたると詞の用ゐざまの正しきとにては、當時この人に及ぶものあるまじく候。げに、秋風を身にそへて小夜ぎぬたのあはれを思ひ、春秋に思ひくらべて人生のうつり變りをうたひ、草亭柳みどりにして魂まつりの烟はやく夏の夜の夢を驚かし、賤の男が吹きすさぶ笛の音に鴈なきわたる夕べの空を思ふ、あるは軍もかをるぬれ燕の聲になげき、あるはしらべかなしきやまと琴の音にうれふ、「むなしき床にねざめては、夢だにも見ぬたまくらの、軍は淵とつもれども、君を見る日は生ひもせず」、人を戀ひては「蜘手にたぎつ山が

はもながれ逢瀬のなくてやは」と嘆き、塵にもそまぬ詩の神の姿をよみては「和歌の浦わの葦邊鶴、さやけき聲のいとたかく、年ごろなれに合せけむ、むかしのねこそこひしけれ」とうたふ。およそ羽衣氏の歌をよみて、生の最も服し居り候は、その秀でたる色彩に御座候。「草かり笛」、「魂まつり」、の起句、または「立秋」、「やまと琴」、などを讀みても、明らかなる色彩の力おのづとその呼吸にはまり、これを畫工のうへに譬ふればチヽアンが流れを汲める「カラリスト」とも申すべく、吾朝にとりたてゝ見れば光琳、抱一が極彩色にも似かよひて、筆は濃しといへども品の高きを失はず、句は美しきうちに沈つき深く候。行く末はいかにすぐれたる詩品をいだしたまふらむ。羽衣氏が作の優美なる色彩にひきかへ、たとへば墨痕淋漓たる狩野の筆意を汲めるかとも覺しきは、土井晩翠氏の

作と存ぜられ候。君はことに晩翠氏の作の中にて、近咏の「暮鐘」を愛誦せられ候おもむき、花近き高樓にのぼりて夕べの鐘の音をきけば、げに自然の秘密を聞くとかやいへる西の國の詩人が言葉も思ひ合され、試みにかの篇をとりて吟誦すれば鐘聲を耳底にうちこむが如くに思はれ候。道義の心深く、他界の美妙を心にゑめて、大雅を慕ふの旨あふるゝほどなる晩翠氏の詩は、かの深く青き「大海をうかゞふがごとく、風靜かに波澄みわたるときは、海底ほのかにいみじき理想の國を見るにも譬ふべきにや。蜂蝶は花に戯るゝにまかせよ、春の姿、花の薫り、春よりも花よりもかぐはしき雲井かなたをめざしつゝ高き羽翼を張れる大鷲を見ずや、あるは鐘の音にそへて造化の聲をきゝ、あるは星の光にそへて清き自然の心をさぐる、されば「天地有情の夕まぐれ、わが驂鸞の夢さめて、鳳樓

いつかあともなく、花もにほひも夕月も、うつゝはつらき春の夜や、尾上の霞たちきりて、縫へる仙女の綾ごろも、袖にあらしはすさぶとも、自然の胸をゆるがして、響く微妙の樂の聲、その一音はこゝにあり」、わけて君の愛誦したまふはこの暮鐘の一節に候由、げに君の言はるゝごとく、一作は一作より高きに進まるゝは晩翠氏の詞境に御座候。君はまた近きころの詩集くりひろぐるうちに忘れがたきは松岡國男氏の戀のうたなりとのおもむき、うれしく候。「アモオル」の歌よみいでられ候はんも少なからず候へども、ことに松岡氏が歌の姿のとゝのひ、すぐれて薫高く思はれ候は、「叙情詩」をとりいでゝもいちじるく候。こゝろみに若葉うれしき楓のかげにありて、田の面の蛙聲を聞きたまへ。こゝろ靜かにその歌を味へば、綠蔭鬱蒼として、日熱く、影深き三伏の夏を呼ぶか

とも疑はるゝがごとく、こまかに「野邊のゆきゝ」などを味ふに、「君し都をよしといはゞ、我も山邊に忘れてん」、思へば花かげにもたゝずみ、月の夜の光にもさそはれ、夕べのみちの露にぬるゝをもいとはず、「野の家」、「山のあらゝぎ」、いづれ胸より胸に傳ふべき深き心の響に候。蛙の歌はおのがじゝ友よびかはす聲なれども、おのづからなる調べのごとくに思はれ候とひとしく、戀は人のすることなれども、氏の口をかりて出づるものは自然のごとくに思はれ候。以上は僅かに病中のつれ〴〵、手にまかせてさぐりたる書につき、いさゝかの感興を記しつけたるまでに御座い得ば、あたらざるふし〴〵は枕上の饒舌と御見ゆるし被下度候。御覽被下候上は、御捨て被下たく候。御暇もあらせられ候はば、ちと御出掛くだされたく、例のごとく話もはづみ申し候はゞ、近ごろの快事ならんかと存じ候。是非〻〻御待申上候。この新茶到來いたしいまゝ、甚だ輕少には候得共さし上申候。御風味被下候はゞ幸甚の至に御座候。書餘は拜眉の節を期し萬〻書きもらしい。

草〻。

火曜日の新茶

折柄到來の新茶、色もみどりに香もよきを飲みさしたる茶椀下に置きて、われは二人の友に向ひ、さきの夜はわれひとり饒舌に耽りたれば、こよひは君等より聞くべきいはれあり、君等もまた語るべき責あり、語りたまへわれは心靜かに聞くべしといひぬ。けふは一日のつとめに奮ひ勵みて、はげくし身を役し心を働かせたるより、夕暮かけて新茶の味もうまく

袷時の夜がたりもおもしろく、白き丸傘はめたる洋燈をかこみて、他人をまぜずこゝろおきなきものゝみにて語りぬ。

年下なる友の言ひけるには、およそ畫工にまれ詩人にまれ音樂者にまれ文藝美術の片隅にもつらなるべきほどの人々が、事業の重きを荷ひ、經驗の杖にすがり、理想と名のついたる星の光をたどりて、道を行く間には、必ずや我はいかなる生涯を送るべきかとの疑問に邂逅ふべし。由來空想の見とも稱せられ、天才の翼をのべて或は小人國に戯れ、或は女人國に遊び、或は歡樂國に哀傷國に迷ふほどの夢想兵衛、ゆくりなくこの實際の疑問に邂逅ひ、ひたと人生に顔合せたるさまは、もろ〳〵の美術家が傳記を讀み、その綴り殘さる自叙の生涯を窺ひて推しはかるゝなり。男子生れて必ずや父となり夫となるの責はあり、勢して產あるほどの位置に到らば、妻を娶り家を成すは人間自然のことなれども、われ思ふに、美術家にとりては必ずしも然らず。それ美術家は翩々として世に遊ぶの蝶なり。その羽は輕くして美しけれども、繁忙なる實世界の鞭韃に仆れ易し。なべての人々が感ぜざるにはあらねど、彼等の心にはこれを十倍二十倍にして感ずるなり。なべての人々が觀ぜざるにはあらねど彼等の心には明かにこれを透視するなり。自然の美妙を味ふの心熾なれば、またその荒廢を傷むの情に於ても切なるの道理、かの夏の野に匍匐る蛇のごとくにその身は青草の間に隱るれども、その頭は常に高きかたに向ひたるより、彼等は一方に於て美術の正當なる應報を樂みながら、一方に故ては常に不平不滿足なり。やゝもすれば彼等が尋常の繩墨を逸出して、破壞者、革命家なる渾名を荷ひ、或は狂と呼ばれ痴と言はれ、自らも亦佯狂して

酒に隱れ情に溺れ世を弄ぶごとき振舞をなすことあるも、彼等は精神の自由を慕ひて世の擒となるを甘ぜざればなり。聞きたまへ、彼等が世の人々と同じやうなる生涯を營み同じやうなる繫忙の間に驅使せられ、ひとしく妻子のほだしに逢ひて感興の遁れ去るがまゝに任せ置かば、その製作は果していかに。げに、美術家は娶れるが幸か、娶らざるが不幸か。こゝに於てわれはいかなる生涯を送るべきかとの疑問に邂逅ふなり。こゝに一人の若き畫工ありとせよ。この畫工は詩人が口を醋くしてさまゞ〳〵の寶にも比ぶべきほどの天才を持てりとせよ。筆を落せば世の鑑賞家を驚かすほどの作品にも富み、友にも羨まれ、師にも愛せられ、豐かに靜かなる美術の半生を送り來りて、或は遠く奈良に遊び古代の名匠があとをたづね、或は到るところ風光の間に寫生の夢をむすびて自然の紅

綠を樂しむがうち、ふとひき結びたる草の枕に寢ても覺めても忘れがたき拾ひ物のありて、野末にさくなる花の姿を筆に寫し畫にも作るほどの思ありとせよ。この畫工の叔父なる人は人生の表裏を洞察するほどの老巧なれば、早くも畫工の心を見拔き、年頃になりて獨住なるは反りて惡しゝ、幸ひかの娘は容姿も美しく性質も怜悧らしければ、賤しきうまれとは言ひながら娶りて然るべしとの粹を利かし、吉日を選びて目出度偕老の契を結びたりとせよ。さなきだに世のほだし多くして破り捨つべきとの多かるに、更に身は忙がしく、心はあわたゞしく、生活のためには興なき製作にも隨ひ、晝夜心を靜境に遊ばしむるの餘裕もなきに至らば、自然境涯もおもしろからず、畫筆を投ちて自らおのれの天賦を疑ふの苦境に沈み、樂しまざれば畫才のびず、畫才のびざれば抱懷も亦

た盡さず、鬱々として家庭の不幸を嘆くにいたるべきなり。こゝろなき評家は直ちにこれを鞭ちて、かれ死せりと罵るべし。彼は死したるか。彼が活火は盡きたるか。げに、美術家はいかなる生涯を送るべきか。

かく語りつぐを、年上なる友の答へて言ひけるには、君はあまりに激したり。われは君の心を取りて、君の言葉を取らず。思ふに、美術家とても社會のうちに連なれるかぎりは、それ〴〵の責といふもの無くて叶はず。人生といひ、自然といふも、持つべきものは持ち、履むべきものは履み、みづから身を其内に置きて後、始めて解釋し得るの道理、君の言ひたまふがごとくに美術家は皆な木のはしと言はるゝをも顧みず、病める時にも慰むるの妻なく、惱める時にも微笑むの子なく、法師にひとしきほどの寂しき生涯を送らば、快樂といふもの

いづこにかあるべき。最愛なる妻子のためとあらば、これがために多少の時間を割き、これがために多少の繁忙を來すことはありとも、そはかへりて樂みとすべきにあらずや。美術家は人工をもて造化の足らざるを補ひ、自然の破れたるを繕ひもこそすれ、身を苦しめ、世を破り、自然の理に悖りて、反て世人皆な昧者なり語るに足らずと悟り顏なるは、わが與せざるところなり。幸福なる家庭を樂しみ、望めるほどの製作に隨ひ、平和なる生涯を送るに勝ることあらんや。

この答を聞きたるとき、年下なる友が清秀なる眼は燈火にかゞやきて一段の光をそへたり。その口唇は震ひ動き、その胸は踊れりと覺しく、感激せる調子にて言ひけるには、げに、君が夢みるごとき安らかなる道をたどりて、隱れたる眞珠のさぐり得らるゝものなりとせば、誰か好みて轗軻窮愁の生涯

を送るべき。彼等も亦た人なり。幸福なる家庭の樂みを知らざるにはあらず、平和なる生涯の旅を望まざるにはあらず、別にこれらのものを捧げて惜まざる心のあればなり。美術の神は妬みの神たりとかや。彼等は一藝のために執着の心深くして、おのれの生命すらも犧牲となすことを厭はず、なんぞ況んや一時の幸福をや、平和をや。我を神佛めかして、身を螢の如くに光あるものとあやまり、わが爲すところに滿足するほどの人の上はしらず、浮雲捉ふるによしなき生死の苦、人力の薄弱にして容易には自然の表裏を透視することかなはざるの果敢なさを覺悟するが故に、或は妻を捨て、或に袂にすがるいとし子を蹴落してもて、尋ぬべきを尋ね、戰ふべきに戰ふの丈夫たらんことを願へるなり。かく言へば、そは畢竟世間を知らざる机上の空論、獨身とは女を高く買ひ過ぎたる上の囈語、さなくば經濟より割出したる胸算用、主義は無妻の男の質女物より置き初め、愚かや空漠なる哲學の尺度はさく措き、眼前の世間を視よと罵らんかなれども、なにがしも言ひけむがごとく、製作に隨ふ美術家の身は既に親たるの世の責を果したるに同じきなり。作品は彼等の愛兒なり。かの白堊の塑像を抱きて霜夜に凍えたりといふ美術家の情は、則ち子を懷にして雪に迷ふの親の情なり。はじめて摺ものとなれる處女作を抱き、うれしさのあまりに階段を上下せしといふ詩人の喜びは、則ち始めて玉の如き嬰兒を設けたるの親の喜びなり。飄逸を姿とし、自在を翼とし、悠々として哀樂の境に遊ぶほどのものは、よし山水の間に放浪するとも、市井のうちに埋沒するとも、酒を假り情を放ちて興を亂舞に肆にするとも、高邁なる製作の存するありて、自然に負へるの債

を返すうるはしさ正しさあらば、そは嚴父なり、慈母なり。想ひ見よ、万古不易なる美術の宮殿を建てゝ以太利の史上に日月の光を懸けたるミカエル、アンゼロが生涯のいかに雄大なる精神に富めるかを。そはあまりに憂愁の生涯なり、ものぐるはしさの限りなりと、傍に立て大笑する者あらんかなれども、試みに名ある詩人が傳記などを繙くに、その家庭は多く不幸の歴史を示すにあらずや。夜半劔を拔きて起ちて舞ひ、砲を發して翠帳紅閨の佳人を驚かしたる詩人の上などは暫く措き、温雅清秀なる作品を殘し置けるほどの人の上にても、その家庭の歴史を讀むものをして、卷をとぢて覺えず大息流涕せしめざるもの少なし。こゝにいたりて美術家はいかなる生涯を送るべきか。君はもろ〳〵の美術家が傳記をよみ、その悲慘なる家庭のありさまにも心を動かさるゝことなく、冷然として、妻ありて碎くるほどの志ならば娶らずとも碎くべしと言ひたまふか。幸福なるかな君の美術。われ笛吹けども君踊らず、われ空飛ぶ鳥の翼を羨めども君は蝸牛の殼の安きを望みたまへり。よろしく君は家庭の幸福をはかりて、其うちに安らかなる夢を結びたまへ。かく年下なる友の語りつぐうち、われは無言にて聞きてありしが、あまりといへば心置きなき長談義、吸子のうちも早や出殼となりて、新茶のかをり既にうせたり。洋燈の油つくるともこの論一夜にはつくしがたし。

水曜日の送別

月曜附錄の紙上をかりて、興に乘じ筆にまかせたるそゝろご

と書きつらね、讀者にまみゆること既に六たびに及べり。鑿を持つものは能く刻らんことをのみ思ひ、鉋を持つものは能く削らんことをのみ心掛くれば足れり、油斷して餘事を語るべからずといふ人もあれど、たがひに胸襟をうちひらきての煙草話、時にとりては又た心に愉快ならずや。かりそめに筆を木曜にはじめたるころは、花さき亂れ、人の心も空にあくがるゝほどなりしが、こゝに七曜のすさびを結ばんとする頃は、はや青葉のかげに佇立みて人を送る更衣の時となりぬ。友の出立はこの水曜日なり。油繪つくるために用意したるそれ〴〵の繪筆、繪具を携へて都の青葉をあとに見のこし、これより西は京都に入りて東山の寢姿をながめ、加茂川の夕暮にあくがれ、さては歌枕名に高きむかしの跡を尋ねて、青によし奈良のみやこに古畫彫像の殘れるをしのび、須摩は浦波のたち

くるほとりにこの夏をすごして、やがて心づくしの秋風に旅人の袂すゞしく都に歸らんとは、さても畫工の心輕さよ。藝術を慕ふのこゝろとゞめんとしてとゞめあへず、龍斗の水を吐くがごとくに溢れいでゝは、目山水の新しきを見、足境涯の新しきを履まんとしたまへる君の心のみにても、すでにわれにはうれしく羨ましきを、君は早や故典のあらかたをも修め終りつ、わか〳〵しき一すじの夢より離れて眼を一碧萬頃なる美術の大海に轉じ、耳聰く心明かに西の國の詩人が所謂美術の自然、自然の美術を窮めんとは思ひ立ちたまへり。げに情は煙を含む柳のごとく、思は花に迷ふ蝶のごとく、よろづうつろひやすきかたにのみ心をなやまして、あわたゞしくて暮す春の夜の夢は既に過ぎたり。譬へば綠の蔭深くして智慧の葉の生ひ茂り、實行の虫は巣を出で、活動の潮は岸に溢れ、

數ふれば想像の星の光すゞしく明かなる朝ぼらけのさまは、君がこのごろの心の夏なり。うらわかきものゝ常とて、あだかも美酒に醉ひ、美夢をたどりたらんがごとく、ほのかに、いみじかりし君が畫趣も、これよりは一轉して更に實の世界に歸り、げに「今」は力ある神となりて君がために言ふべからざる機を發すべきなり。過る四とせ五とせの間、君は情感のほそくかすかなるかたにすがり、わか〳〵しき空想を滿足せしむるほどのものにあらざれば、見ても見ず、聞きても聞き入れず、畫くも寫すもひとへにこのかぎりある夢の國のうへのみなりしが、この春君がものしたる農夫耕作の圖を見るに、生活のために戰ふいさましき心を農夫が手足の筋肉にあらはして、こゝに日の光のうるはしくさし入りたる、可憐なる野の花のさきそひたる、われは心ひそかに單純なる情感の世界をぬけいでゝ更に深き自然の懷に飛躍を試みたまふ君がこのごろの進境に驚きたりき。こゝろみよ、さらばその事必ず成らんとかや。かのこゝろなき美術家のごとくに失敗したる製作を捨つること、腐りたる林檎を捨つるが如くなしたまふなかれ。作は油畫と水彩畫「チョオク」畫とを撰ばず、寫生のさゝやかなるをも納め歸りてこの秋いつか相見んときの語り草としたまへ。物がたりのめづらしく、歌のおもしろく、酒のあたらしく、花のかをりよく、女の愛らしきもあらば、こまかく手帳のはしに記しとゞめて興をわれらの間に分ちたまへ。十の畫論を得んよりは一の畫題を得るにしかず。十の畫題を得んよりは一の作品を得るにしかず。哲學をして「カンバス」の後に隱れしめよ、われらが望めるは靈妙なる繪畫にありと、なにがしも言へり。そは畫論の高きによらず、畫題の雅なる

にもよらず、たゞ美術家の心を開展して、行くべき道を教へ、進むべき望を與ふるものは、力を奮ひて製作に隨ふの外あるまじければなり。活動は父なり。愛慕は母なり。われも過るとし秋風の吹くところに白河を過ぎて、みちのくに草の枕をひきむすび、旅情なぐさめかねしをり〳〵は、好めるまゝに筆を染め小詩を書き綴りなどしけるに、いさゝかなる活動にはげまされて迷ひやすき心を救ひしことあり。としわかきほどのものは、手を拱きて過こし夢をのみ思ひなやみ、他の道行くさまをのみ眺め勝なるときは、おのづと心乾きて樂しき霑ひあることすくなし。興もあらば乘じたまへ。思もあらば展べたまへ。笈の繪筆に夏の光を寫して自然のたくみを奪ひたまへ。色も彩も君のものなり、げに西の山々は君のために浮べる雲をとゝめ、須磨明石の浦々は君のために白き波を揚げ

んとはすらん。こゝろせよ、われは君が情の正しく壯なるにより、君がこの夏の作品を卜なはんと、かく言ひて相見るまでの恙なき旅を祈り、互にこゝろよく袂を別ちぬ、げに言葉は名殘をつくさねばこそ。

雅言と詩歌

言靈の幸はあつき大和島が根のたのしみを傳へしは、われらの質朴なる祖先なりき。朽せぬ神の惠み豊かに、事と咏はん嗟嘆の聲、いかで萬の國に秀でざらんやとは、歌人が互に祝ふのよろこびなりき。げにやこの國に生ひいでたる藝術の葡

蔔の酒にも譬へられて、年と共に其の味を増すもの多かるなかに、わけて花とも見るべきは詩歌なり。されどその詞花爛灼として千載の史上に煥發するにもかゝわらず、遂に誇るに足るべき賦法の發達を見ること能はざりしは何ぞや。この疑問は過る幾とせの間、常にわが胸中を往來せり。

われ未だ少年にして友と共に西詩の卷々を繙きそめしころ、高輪より御殿山に通ずる小徑はわがおさなき空想を養ひしところにして、深く靜かなる綠の蔭に遊ぶときは無心にして詩歌の上など想像するを樂みたりき。頃は新聲社の諸氏が『國民の友』に『面影』の譯詩を投じ、美妙齋主人が長篇の『韻文論』を草し梅花道人等の新作世にあらはるゝほどなりし。歲月梭の如くにして早や九とせほどを經たり。ことし高輪に赴きて。かの小徑を過ぐ。春の日の光あたゝかにして梅花まさにさかりな

り覺えず懷舊の情に驅られて詩歌に關する昔日の想像胸中に湧出し、遂に日頃のふつゝかなる研究をとりあつめて、この一文を草するの心を起しぬ。

あやまてり。われは雅言と詩歌といふがごとき題目を置きながら、情感の言葉をもて先づこの文を行らんとしたり。許したまへ日頃根無草の花も香もなきを公にするの機は多かりしかど、かゝる研究のもとに讀者に見ゆること殊と稀なればなり。われは今手袋のまゝにて讀者の手を握ることあたはず。よし、吾意は既に通ぜり。それ靜かに明かなる心を供へざれば、美術の研究に隨ふ能はずとかや。しからば、われらをして思を平かにしてこの問題に對せしめよ。

熾盛なる情熱の聲調を愛慕するよしは人の言ふところにして、甚深なる感想の旋律を有するよしも亦た人の說くところにあ

らずや。青春の時代は即ち情感の時代なり。このゆゑに古來の天才が肺肝より流露するもの、おのづから詩賦となり樂曲となりて星の如くに藝術の諸天を照すの作は、青年時代の空想に驅られたる者多し。ゲエテが『若きヱルテルのわづらひ』を草するや、年正に二十五、多情多恨の秀才にして加ふるに藝術の愛慕やみがたきの賦性を以てす。かの畫工が輕衣青衫、身に燃ゆるがごとき空想を抱きつゝ、花の如きロッテに邂逅するさまを寫すがごとき、其の書簡は一紙として深き情熱の聲にあらざるはなし。宜なるかな、散文にしてかくまで美しき聲調を供へたるは稀なりと言はるゝこと。激越奔放なる青春の意氣はバイロンをして心を靜かにして世を觀ずることを許さしめず、乃ち紅涙潸々、『巡禮篇』の鬱勃たる悲調を成せり。閑寂なる寺院の生涯は鬼才グノオの長く堪ゆべきところにあらず、乃ち再び樂堂に歸りて、幽玄深奥なる『ファウスト』の曲を作る。感情の活動迸發して聲調に入るや斯くの如し。マンテガザの科學的研究は更に一歩を進めたり。かれは人間の感情の不規則なる調を成すものにあらずして、おのづから正しき拍子に隨ふことを言へり。げに內部の深情を掩ひ隱さんとして、之れを顏色にも聲音にも發せざらんと勉むる時の如き、手と足とは自然に拍子を定めて人知れず鼓動するに至るを見る。これ四支の言ふべき口にかはりて、感情の發露を示せる者か。詩歌も亦た斯の如し。わが國の詩歌の五七七五といひ、漢土にて四言、六言、五言、七言といひ、西詩の二拍子(Diametre)三拍子(Trimetre)四拍子(Tetrametre)五拍子(Pentametre)といふがごときは、こゝにおいてか生ず。言ふまでもなく五七といひ七五といふは吾國に於る詩歌の拍子なり。(ラニヱルは日本の和歌をもて三拍子の十節より成れる

がごとく」に言へど、こは賦法の上にあらずして、吟誦の上より立てたる一說とも見るべし)。これを漢土に就きて見るも、四言六言の如き隅數に屬する拍子は寧ろ優勢の詩躰とならずして、李陵蘇武をもて始まれる五言、漢武帝拍梁臺をもて始まれる七言は、建安、黃初、初唐、盛唐、晩唐より國朝の諸躰に到るまで、その深き根底を成すにいたれり。たゞ奇數なる點より見れば、支那の七言、五言はわが七五、五七に通へるがごとくなれど、拍子の性質はいたく異なれるものにして、或人は評してヘブリユウの古詩(Psalm)にあらはれたるがごとき泰西詩學の所謂「セシュウラ」(Ceasura)に彷彿たりと言へり。「セシュウラ」は休息の義にして、一詩句のうちに一定の休息あるをいふ。吾國の詩歌の直ちに十二言といはずして五七、七五といひ、必ず一句のうちに一定の休息あるを見れば「セシュウラ」の說或は比較の當を得たるものに近からんか。

わが國にて歌學に用ゆる言葉には定かならざるもの多し。隨て一語にして數義に用ゐられ、殊にかの調といふがごときは、歌のしらべ(Melody)の意にも用ゐ、韻律(Rhythm)の意にも用ゐ、又は詩風(Style)の義、語呂の義にさへ用ゐたり。眞淵が『にひまなび』を著して、「古への歌は調を專とせり、うたふものなり」といふや、景樹は『新學異見』に於て之を駁し、「歌は曲調にかけたる後、となへいでさる稱なりと思へるは、なか〳〵本末を取りたがへたるものなり」と言へり。見るべし、景樹は樂人が用ゆる調の義として之を擊ちたることを。然れども眞淵の調なる語は、景樹が歌のしらべとして用ゐたる意の外に出でんや。眞淵は古代を景慕してその精神を尋ねんとす。故にその調は古代の歌にあらはれたるしらべを言へり。景樹の立脚

地は寧ろ眞淵に反して立てり。その着眼は目前の自然にあり。故に「あたるものとして調を得ざることなし」といへり。實に吾國の歌人が律語特有の伎倆として振ひたるの力は、正しき韻律の上に見ることを得ざるなり。われらはたゞ歌のしらべに於て之をうかゞふのみ。

眞淵は萬葉の變遷を序して、はじめを高市崗本宮までの時、つぎを藤原の宮の時、つぎを奈良朝のはじめ、つぎを奈良朝のなかばとなせり。かの朝倉の宮の御宇に於る御製の古歌はいふもかしこし、寧樂の遷宮は和銅三年にあたりたれば、之れを區劃として前後に於る和歌のしらべの變遷を比較するは、好古の士にとり最も樂しき研究の一つなり。近江の荒都を過ぎて懷古の歌をうたひし人麿は、詩日の光をおさめて奈良遷都の前すでにうせぬ。

萬葉の歌のしらべをさぐらんには人麿に行くよりよきはなし。かの御嶽の高きに登るものにして、始めて乘鞍が嶽、駒が嶽、淺間が嶽などの群山を一眸のうちに納むることを得るごとく、人麿に登りて、始めて赤人の高きをも、億良の秀でたるをも、眞淵が所謂大津の御子のゆたけき姿をも、志貴皇子の靜かにして細やかなるをも、厚見の大君のにぎびて直きをも、黑人の厚らかにして面白きをも、又は大伴旅人のをゝしきをも、家持のなだらかなるをも、或は其の間に起伏する群嶽の姿をも望むことを得べし。眞淵はこの山の麓に籠りて、謙遜なる一生を送れる宮司のごときか。遠く遊覽してこの山に登らんとするものあれば、宮司出でゝ説て曰く、「いにしへならず後ならず一人の姿にして、荒魂和魂いたらぬ隈なんなき、其長歌、勢は雲風に乘りてみそら行く龍の如く、言は大海の原に

八百潮の湧くがごとし」と。高古簡樸の姿は既に拜せり。われらは讀者と共に講社としてこゝに到りしにあらず、別に研究を目的とする旅客として來りしなり。よし、われらをして踵を轉ぜしめよ。

家持の逝きたるは延曆の四年にあたれり。六帖を經て、古今に到り、更に遠く昔を回顧すれば、萬葉は恰も自然を見るがごとし。松柏亭々として雜木と共に生ふるがまゝなり。百花は其の間に在りて開落するに任す。轉じて古今に來れば、むかし荊棘の茂れるもの、大樹の横はれるもの、殆ど其の名殘をとゞめず、おのづからなりし野山の姿はみやびたる桃李のながめに變りて、道も亦あらたまりぬ。さきに爽快なる自然として見しところは、時世と共に美しき遊園の天地となりぬ。在原中將、文屋康秀、小野小町、喜撰法師、大伴黒主、さては花山僧正より、延喜の御宇にくだりて、貫之、躬恒を始とし、忠岑、元方、興風、友則、深養父等にいたるまで、歌の色香はにほひて二十卷にあまれり。才華を誇負すること景樹のごとくにしていかで當時を羨望せざらんや。許して曰く、

「萬葉集の頃は質朴にして木強く、古今集の頃は文華に移りて清柔なるべし、さるは時運のしかるところにして、一國の上にかけて論らふべきにあらずと」。かくの如くその歌のかずかずは、萬葉の高古にして簡樸なると大に面目を異にしたり。しかすがにその調は變遷して、景樹が所謂萬葉のひなびたるを離れたり。然ども漢詩の刺激を受けて國歌の精神を發揚したる古今集も、律語の賦法に於ては變遷と發達との跡を見ず、遠く万葉と異なるところなし。

それ代々の歌集を觀るに二途あり。一は歌集と歌集とをひき

はなして見るなり、一は歌集と歌集とをつなぎて見るなり。前者は身をその中に沒了して底ひしられぬ藝術の海の深さを味ふべく、後者は身を靜かなる傍觀の位置にさだめて遠く詩歌の潮の行衞を望むべし。若し後者の法によりて代々の歌集を繙かば、恰もかの好古の美術狂が書堂のうちに歷代の古畫を見めぐり其の色彩の調子をたづねて前を承け後に傳へたる變遷を忍ぶがごとくならん。見よ、六帖、古今のしらべは萬葉の上に築き、拾遺後選の歌のしらべは六帖古今の築きたる上に築き、後拾遺、金葉、詞花、續詞花の歌のしらべは拾遺、後選の築きたる上に築き、千載、新古今、新勅選の歌のしらべは後拾遺、金葉詞花、續詞花の築きたる上に築き、續後選、續古今、續拾遺、新後選、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今、新葉の歌のしらべは

又た千載新古今新勅選の築きたる上に築きたり。われは今、歷代の歌調を譬ふるに一つの大なる伽藍を以てせんとす。遠き萬葉は言の葉の林をひらきて、深くも重くも置きなしたる礎なり。今世の歌のおやと言ひけむ中むかし清和の御時より、醍醐村上の御宇にうつりて、所謂「すこし造りたる姿も見え初る」頃よりは、ふとき柱のゆるがぬさまも見えて、みやびたる言靈のすみかとはなれり。梨壺の五人のたくみは甍いかめしく軒深くしなして、更らに欄干のうるはしきも添へたりとやいふべき。それより後白河院の御世まで、初めの六代、後の六代は、梁に雲の姿を彫め、柱に龍の勢を刻みたるがごとく、さすがに遠き昔のかざりなきさまにはあらず。壬生二品、京極黄門が一生をこの寺にさゝげて彫琢のわざにつとめたる、後鳥羽のみかどの好ませ給ひし御姿のすぐれたりと言

はるゝ、なべて四條院の御宇までは紫紺の色を塗り、丹青の彩を加へて、金色銀色まばゆきばかりこの堂宇のうちそとに光を放つさまなり。千載集はこの世の姿を見せたり。花園の御時より下りて、伏見院の御時に玉葉を選ばせ給ひ、萩原の御時に風雅を選ばせ給ひしは、更に美しき壁畫の花を添へたるにひとし。元應の頃のあざやかなる、永享の頃のこまやかなる、さながら新しき繪額のかずゞをもてこの堂のうちに掛けつらねたるがごときか。嗚呼華麗にして横溢に、雄邁にして豐富なる德川氏時代の精神を以てすら、詩歌の賦法に於ては古代の外に逸出するを得ざりき。いにしへを見ること第二の自然を見るがごとくなりし景樹の鋭意を以てすら、歌式の舊套を破らずして調の新たなるに任せたり。

かくのごとく吾國の歌人が藝術の心をとゞめし作品のあとを

眺むれば。代々の歌調相承け相傳へ、簡樸より精緻に古雅より纖麗に、單純より複雜に赴きたる變遷のあとを見るといへとも、遂に韻律の美をなすことを得ず。誠や支那文學の浸淫久しからずとせず、漢詩が國歌の精神を刺激すること少なからずとせず、然るに吾國の歌人が律語特有の伎倆を振ふの餘地少なくして、千載の久しき殆と同一轍に出でたるは何ぞや。藝術として之を眺むれば誇るべきところ少なき形式の外にて、其の拍子を數ふるのみにて更に複雜なる賦法を成すこと能はざりしは何ぞや。西暦千七百五十二年、以太利の樂人が巴里に赴きてその劇場にパアゴレス等の曲を披露するや、佛蘭西の樂人をして驚嘆と嫉妬の外なからしめたり。藝術を以て自負すること深き巴里の市民の如きもの、豈に動搖せずしてやまんや。忽ち一世の論議はこの問題に傾注して、政府は

遂に以太利樂に關する書簡の發賣を禁ずるに至りき。ルウソオがその翌年公にしたる『佛蘭西音樂に關する書簡』は、この論爭を機として佛蘭西の國樂を批判したるものなれど、其の論は引て國語の上に及べり。彼嘆じて曰く佛蘭西の國民には音樂なし。眞理公論の機關を以て任ずるわれらの國語は、遂に詩歌と音樂とに適せざるなり。凡そ國樂は皆な其の基礎を國語に置かざるべからず。もし歐洲に於て最も音樂に適する言語を問ふ人あらば、われは以太利語なりと答んと欲す。伊太利語は幽婉、明晰、諧和にして、他の國語に比すれば抑揚に富みたり。こは疑ひもなく最も歌ふに適したる言語なるを證す。以太利語なるかな、その子音の連接は柔かにして微妙なり、その發音は純粹なり、そのつゝりの只一母音より成れるがごときは殊に流暢なり、その母音は皆な完全にして豐滿なり、その二母連接音は亂雜なる音響をとゝめず、ことに言語の旋律と相調和するの點に於ては佛語の比にあらざるなり。佛蘭西の歌調のごときは豈に眞の旋律を成すに足らんや。變化もなく、興味もなく、僅かに不規則なる裝飾を補綴して俗耳を喜ばしむるに過ぎざるのみ」と。それ佛語にしてルウソオの判するところ斯の如し。かりにルウソオをしてわが國語を比較せしめ、その天才の明鏡をとりてわが詩歌を照さしめば、乃ち如何。われはその批判を聞くに先だちて耳を掩はんと欲す。

わが國の和歌に正しき韻律の進歩あらすして、美しき歌調の歴史あることは、既に之を言ひたり。われは更に一歩を進めてこゝに至りし所以を窮めさるを得ず。それ言葉の海は深く廣くして測り知るべからずといへども、高潮ひとたび詩人の

心によせては、風濤のおのづから岸に上るがごとし。必ずや美玉を遺して人の拾ふに任せたり。雅言は即ちいにしへの歌人が遺したる美玉にして、古語の粹なるものなり。われはこの美玉につきて、詩歌に對するの約束をさぐり、優雅なる言語と雖も一面には詩歌に不利なりし點を述べて、聊か平生の疑問を解かんと思ふなり。

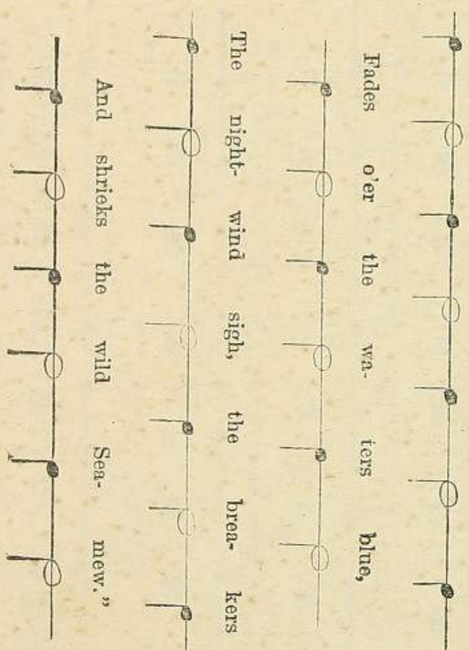
不利とは何ぞや。第一、母音の性質圓滿ならず。第二、發音の高低抑揚明かならず。第三、言語の連接單調なり。第四、語義精密ならず。第五、語彙豐かならず。第六、音域廣濶ならず。第一と第二と第三とは韻律の上より言ひ、第四と第五と第六とは表情の上より言へるなり。

われは第一、母音の性質圓滿ならずといへり。五十音連圖第一行に於るこの五母音は言ふまでもなく複音なれど、皆な單純なる聲音にして、充分に氣息を滿たすべき餘裕を有せず、又た氣息を急にすべき變化を有せず。夫れわれらが胸中の感情を自然の肉聲に表はすにあたりてや、喜べばおのづから滿ちて高く、哀しめばおのづから長くして沈めり、怒る時は迫り、恐るゝ時は震ひ、愛する時は暢び、憎める時は急なり。

譬へば、平聲あり、上聲あり、去聲あり。入聲ありて、之に應ずべし。譬へば ā, á, ǎ, à, ä, a̋, a̋, a̋ のごとく e, é, ě, è, ë, ē, ē, ē のごとく ī, ī, ī̋, ī̋ のごとく ō, ó, ǒ, ò, ö, ȍ, ȍ, ȍ のごとく、又た ū, ú, ǔ, ù, ü, ṹ, ṹ, ṹ のごときありて、之に應ずべし。長短乃ち生じ、聲調こゝに於て明かなり。之を二音に連ぬれば、長短（平仄○●、Trochee —（）、短長（仄平●○ Iambic（—）、長長（平平○○ Spondee ——）短短（仄仄 ●● Pyrrhic（（）となり、之を三音に連ぬれば、短短長（仄仄平●●○ Anapest（（—）、短長長（仄平平●○

○ Antibacchic (— — —)、長長短（平平仄○●● Bacchic — — (—)、長短短（平仄仄○●● Dactyle —(—)、又は短長短(Amphibrach (—(—)、長短長（Cretic —(—) の如くにして、詩歌は直ちに人間の感情を表はすの術となり、見えざる胸中の調は、明らに韻律の形を以て窺ふことを得べし。かのシェルマンが恐怖の情を寫したるためしとして、シェキスピイアの史劇『リチヤアド第三世』の初齣第六節を引きa, ō, ō, oi, ū, ū, の諸母音及び m, w, の子音を疊用したることを稱したるがごときも、母音に自在なる變化ありて始めて到ることを得べきの詩境なり。わが雅言の母音の如くにして、いかでかゝる情緒に應ずることを得べきや。聲音の長短、踏韻の餘情、皆な其の基礎を母音に置きて、始めて變化の自在なるを得るといへども、雅言のごときは直ちに之に應ずることを得ず。今かりに西樂記譜の

法を用ゐて、一音の短かきを四分音符に、長きを二分音符にて表はすときは、『チヤイルド、ハロルド』篇中告別の歌初節はかくのごとし。



李白が『遊洞庭』の七絶（平起偏格）を以てこれに比するに、

洞庭四望楚江分
水盡南天不見雲
日落長沙秋色遠
不知何處吊相君

更に古今第十五、戀歌五のはじめなる業平の歌をとりいでゝ前の二つに比ぶれば、

つきやあらぬ
はるやむかしの
はるならぬ
わがみひとつは
もとのみにして

見よ、わが雅言の母音の圓滿ならずして、韻律を成しがたきの已むを得ざるとを。之を韻脚の上より見るも、既に母音の

長短なきが故に、複韻(二母音脚三母音脚)は更なり、單韻(Compl ete)と雖も之を用ゐて所謂「一里塚」の妙味を感ぜしむること難し。

第二、發音の高低抑揚明かならずして、「アク・セント」の極て薄弱なる、第三、言語の連續單調にして、一語より一語にうつるの間滑かなるに過ぎ、爲に一語を味ふの遑なくして直ちに次の一語に流れ行くがごとき思あらしむる、共に聲調を力を減ずるの基にして、所謂大理石を截斷せしがごとき明晰なる韻律を成すに利あらざることは、明らかなるふしなれば多く言はず。

われは第四に於て語義の精密ならざるを言ひ、第五に於て語彙に豐かならざるよしを言へり。言語の發達が總合的より分析的に向ふは、史に精なるものを待たずして明かなることなが ら、吾が雅言のごときは極めて醇粹なれども亦た極めて單純にして、一語にして數義に用ゐられ、語意多くは總合的なり。隨て復雜微細なる感想を盡すにかたし。試みに山家集を繙きて、かの內觀の深きこと西行のごとき歌人がいかにその境に應じて情を寫せしかを見よ。

行春をとゝめかねたる夕暮は
あけぼのよりもあはれなりけり

こは三月晦日に讀みたる歌にて、上の卷、春の部の終に出でたり。同じ卷、夏の部、題しらずとして郭公を詠じたる二首のうちに、

山さとの人もこすゑの松かうれに
あはれにきゆる時鳥かな

見よ、暮れて行く春の夕べのとゞめかねたる、さすがあわた

いしき花の名殘の哀艶なるかたも、茂りゆく青葉のかげの恨み多き頃、山里の松の上に鳴く郭公の聲の幽鬱なるかたも、同じくあはれと言ひいでたり。

となりねぬはたのかりやにあかすよは
しかあはれなるものにそありける

月すむと萩うへさらむ宿ならは
あはれすくなき秋にやあらまし

身にしみてあはれしらする風よりも
月には秋の色は見えけり

こゝろなき身にもあはれはしられけり
しきたつ澤の秋のゆふくれ

思ふにも過てあはれにきこゆるは
萩の葉ゝ散たる秋の夕かせ

いつくとてあはれならすはなけれとも
あれたる宿そ秋はさひしき

鶉鳴く折にしなれは霧こめて
あはれさひしき深草の里

秋興の清涼にして、人を傷ましむることの多き、暮春の空のおのづから艶にして、物を思はしむると同じからず。しかるにそのあはれといふにいたりては一なり。

何となく暮るゝ雲の音までも
山へは雪そあはれなりける

あはれしりてたれかわけこむ山里の
雪ふりうつむ庭の夕くれ

山里は雪ふりうづみて軒のしづくの音もわびしき冬の日、尋ねよるものもなくてひきこもりたる寂寥の心地は、これまた

鶉鳴く秋のあはれに同じからず。

あはれとも見る人あらは思はなむ
月のおもてにやとす心を

あはれしる涙の露はこほれけり
草の庵をむすふちきりは

琴の音に涙をそへてなかすかな
絶なましかはとおもふあはれに

この三首のはじめなるは、下の巻、戀の歌、次なるは雜の歌、五首述懷の一つ、終なるは院の小侍從を病床におとづれて、和琴のしらべを聞きたる折の歌なり。見よ切なる同情を求むるかたにも、無常迅速を嘆くかたにも、又は悲哀の思とゞめかねたるかたにも同じくあはれの文字を用ゐたり。もとより西行が情緒の切にして、感傷の激烈なること平常の人と異なれる、果た悲哀の涙を通して幽玄なる自然を觀じたるは、理想の赴くところおのづからあはれの文字多き所以なるべし。然れども境に應じては、哀しきうちにも艶なるあり、さはやかなるあり、暗きあり、光あるなり、或は哀しくしておかしく、或は哀しくして寂し。かの西行のごとき歌人にして、之を同一の語に寫しいでたるは、吾が雅言の意義精密ならずして、隨て語彙の豐かならざることを證するものにあらずや。第六、雅言の音域廣濶ならずとは、譬へば古琴の音域に限りあるがごとし。限りなきは琴にあらず、言語にあらずといへども、他に比してかく言ふとを得べし。洋琴の大なるものは最低の八音よりして五點八音の高きに及ぶ、其の音域は八「オクタアブ」にわたれり、變化に富めるはこれがためにして、吾が箏の能く企て及ぶところならんや。『大オーガンの聲』とた

ゝへらるゝミルトンの詩歌は、其の音域の豊かなること、吾がみやびたる言葉の能く寫し盡すところならんや。固より言語の上に於る音域の廣狹は、樂人が高低の義に明ゆる音域と同じからす。樂人は清濁を言はずして純騷を言ひ、われらは高低を言はずして廣狹を言へるのみ。見よ雅言に於ては、ガ行、ダ行の深くして重々しきをも、ザ行、バ行の明らかにして力あるをも、多くは之を避けたり。和歌に「にごり」をうたざる習慣の如きは必らずしも見るに雅ならざるが爲のみにあらずして、たま〳〵雅言の性質を示すものといふべきか。之を俗語に比するに、頭音の濁れるものあるがごときは多く雅言に見ざるところなり。ラ行に至りても亦た然り。其の爽かにしておもしろきも、頭音となりて語にあらはるゝこと稀なり。バ行の奇なるは殆ど見るべからず。かのひたすらに清みて美しきはあれども深く重きを避けたるは、遂に人をして優麗の畫くべく、壯美の寫し難きを嘆ずるに至らしむ。壯美の粗にして既に寫すへからず、況んや、恐怖、憎惡、怨恨、嫉妬、憂愁の微なるをや。

かくのごときは吾國の歌の花の生ひいでたる土壤なり　吾國に韻律の賦法なかりしがごときは、歌人がこれを顧みず、ことに思ひ到らざりしの故なりと言ふべきも、又た一面より見れば實に言語の組織が韻律の蕾を發せざるに因ると言はざるを得ず。見よ科學ありて後、自然あるにあらず。批評ありて後、藝術あるにあらず　詩歌は花なり、韻律は香なり、むしろ自然に發すべきものゝみ。

わが雅言の詩歌に弱きかた六つを述べたるうち、後の三つは主として表情のうへにかゝれり。近代の平語にちかつきて表

情を試みたる俳諧、淨瑠璃のごときものが、いかに語義、語彙もしくは音域音色の上に於て雅言より離れたるや、何故に賦法に於ては和歌と異なるところなかりしやの如きは、題を改むべき者なれば今は言はず。われは以上の小研究を以て、和歌に韻律の美なかりし所以、又たその組織が複雜なる時代の感想と適合せざるに至りし所以の平生の疑問を解けりと言ふことを得ざれど、斯の如きは實に雅言の約束なることを述べて、聊かこれを讀者に分つに過ぎざるのみ、詩歌の研究豈に容易ならんや。

終

◎文學雜誌界之覇王◎

毎月一回
一日發行

新小説

編輯主任 後藤宙外

◎極彩色繪葉書毎號二葉附錄

『新小説』は小説を主とし文學、藝術、社會に關する饒味有益の記事に富む日本第一の大雜誌なり
◎本誌に執筆せらるゝ諸大家には紅葉、露伴、柳浪、眉山、天外、鏡花、風葉、曙山、春葉、秋濤、鶴伴、宙外その他十餘名あり。

小説欄 ―― 之れには毎號長短數篇の作を新舊諸大家に起草を乞ひて掲ぐ。
雜録欄 ―― 下一般には高尚鈎玄の文と平易饒味の記事とを併載して上流の歡迎に背かざるべし。
時文欄 ―― 宙外氏が公平穩健の筆を以て縱横に現時の文界を評論し諸名流の新脉詩、美文等を採録し、傍ら寄書の文苑欄 ―― 俊秀なる物を併載して光彩燦離。
海外文壇 ―― 歐米各國に於ける文界の趨勢、思潮の張落、文士の動靜、著書の紹介を爲すべし。
譚叢欄 ―― 社會各方面に渉りて一代の名家と稱せらるゝ人々の社說を筆記して風丰意氣共に躍々、又此の以外の諸國噺 珍談奇聞をも掲ぐ。
詳國土産 ―― 全國の名所、舊跡、傳説、口碑、俗謠、俚歌、名藝苑欄 ―― 人の逸話等を募集して掲載するもの。
流行欄 ―― 藝道には演劇、相撲、落語、講談、淨瑠璃その他百般の藝道に關する多趣味の記事を收む。
社會欄 ―― 衣服、風俗、裝飾品その他社會百般の流行を精細に報道し、巧妙なる挿畫を以て記事の足らざるを補ふ。
挿畫には社會各方面の人物を以て文の足らざるを補ふ。鋭利周到なる觀察記にして、傳神

實價 一冊金郵稅共貳拾錢 ヶ月前金郵稅共壹圓廿二錢 一年十二冊前金郵稅共貳圓四錢 郵券代用一割増

發兌元 東京日本橋通四丁目一番 電話日本局五十一番 春陽堂

若菜集

島崎藤村著
中村不折畫

郵税金四錢
實價金廿五錢

若菜集目次○おえふ○おきぬ○おさよ○おくめ○おつた○おきく○明星○草枕○潮音○春の歌○新曉○若水○春の歌○佐保姫○春の曲○醉歌○二つの聲○白壁○四つの袖○暗香○蓮花舟○葡萄の樹の蔭○高樓○天馬○哀歌○母を葬るの歌○梭の音○鷗○流星○夏の夜○晝の夢○東西南北○懷古○秋の歌○初戀○狐のわざ○相思○一得一失○傘の内○ふにし○知るや君○秋風の歌○雲の行衞○逃げ水○月光○强敵○別離○望郷○葡萄の木影○鶯○深林の遊遙

一葉舟

島崎藤村著
中村不折畫

三色版及アートタイプ版
挿畫入
實價金三拾五錢
郵税金四錢

一葉舟目次○おちば○春やいづこに○鶯の歌○銀河○白磁花瓶賦○きりぎす○ながれみづ○松島だより○葡萄の樹のかげ○春詞○秋詞○真絲○亡友反古帖○友に寄するの書○四花餘香○木曾谿日記◎製本四六版表紙は石版彩色刷紙數二百頁

島崎藤村著

夏草

下村觀山
横山大觀菱田
春草西郷孤月山田
敬中寺崎廣業畫

夏草目次○晩春の
別離○曉の誕生○終
焉の夕○月光五首○うぐ
ひす○かりがね○新潮○忘草を
讀みて○高山に登りて遠く望
む○二つの泉○天の河二首
○落梅○婚姻の祝の
歌○農夫上下二卷

四六版美本
アートタイプ版畫挿入

實價金三十錢
郵税金四錢

明治三十四年八月廿二日印刷
同　年八月廿五日發行
同　年十一月廿五日再版

落梅集
實價金參拾五錢

著作者　東京市日本橋區通四丁目五番地　島崎春樹

發行者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目　和田もゑ

印刷者　東京市日本橋區通四丁目角　佐久間衡治

發行所　電話本局五十壹番　春陽堂

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目　株式會社　秀英舍第一工場（電話番町十九番）

著作權所有

●內に發行者●
●出版警告●
●文學書籍目錄●

梅田晩翠